貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第61集

森下代（もりしもだい）遺跡発掘調査概要

2002. 1. 31

医療法人 永和会 貝塚サナトリウム
貝 塚 市 教 育 委 員 会

はじめに

大阪府南部に位置する貝塚市は、南は和泉山脈に接し、北は大阪湾に面しており変化に富んだ自然環境が残されています。

森下代遺跡は市の内陸部ほぼ中央に位置する大字「森」地域に広がる遺跡であります。本遺跡は中世の集落跡と考えられておりましたが、縄文時代の土器、石器が出土し、新たな成果を得ました。

これらの成果は、本市ならびに周辺地域の歴史を明らかにするうえで、まことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成14年1月31日

貝塚市教育委員会

教育長　山　本　太三郎

例　　言

1．本書は、医療法人永和会　貝塚サナトリウムの依頼により、大阪府貝塚市森474－2他17筆地内に所在する森下代（もりしもだい）遺跡において実施した、民間開発工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は確認調査を平成13年５月21日より平成13年５月24日、２次発掘調査を平成13年６月13日より８月31日にかけて実施した。なお内業調査については本書刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、医療法人永和会　貝塚サナトリウムより多大な御理解と御協力を得た。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員三浦基が担当した。

5．本書の執筆・編集は三浦が行った。

6．遺物写真撮影は三浦が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　　調査に至る経過 …… 1

第２章　　位置と環境 …… 3

第３章　　調査成果 …… 5

１．調査の概要…… 5

２．基本層序…… 6

３．検出遺構…… 11

４．出土遺物…… 13

第４章　まとめ…… 19

図　版　目　次

図版１　検出遺構
　　航空写真
図版２　検出遺構
　１．地山上面　検出遺構　西半部
　２．同上
図版３　検出遺構
　１．地山上面　検出遺構　中央部
　２．同上
図版４　検出遺構
　１．地山上面　鋤溝群　西半部
　２．地山上面　鋤溝群　東半部
図版５　検出遺構
　１．SD－2001
　２．同上
図版６　検出遺構
　１．SD－2001　北半
　２．SD－2001　南半
図版７　検出遺構
　１．SD－2001、SD－1019
　２．SD－2001断面
図版８　検出遺構
　１．SD－1028
　２．SD－1019
図版９　検出遺構
　１．第４層上面　鋤溝群
　２．同上
図版10　検出遺構
　１．第４層上面　鋤溝群、SD－1028
　２．第４層上面　SD－1028
図版11　出土遺物
　縄文土器：第４層（53、54、56～58）、第２～第３層（55）、弥生土器：SD－2001（１～６）
図版12　出土遺物
　SD－2001出土遺物　弥生土器（３～６）、石鏃（49、50）
図版13　出土遺物
　須恵器杯蓋：第４層（８～11、59）、第２～第３層（60）、須恵器杯身：第４層（13、14）
図版14　出土遺物
　瓦器椀底部：第４層（21～23、25～27）、瓦器小皿：第４層（29～32）
図版15　出土遺物
　緑釉陶器：第４層（７、61）、須恵器：第４層（15）、青磁碗：第４層（34）、白磁碗：第２～第３層（39、40）
図版16　出土遺物
　石器：第４層（45、51、52）
図版17　出土遺物
　石器：第４層（43、44、46、47）、第２～第３層（47）、フイゴ羽口：第２～第３層（62、63）、瓦：第２～第３層（64）

挿　図　目　次

図１　確認調査位置図
図２　貝塚市遺跡分布図（部分）
図３　調査地位置図
図４　調査区地区割図
図５　柱状土層図
図６　遺構配置図（地山上面）
図７　遺構配置図（第４層上面）
図８　SD－2001平・断面図
図９　SD－1028平・断面図
図10　SD－2001出土土器
図11　緑釉陶器
図12　第４層出土遺物
図13　第２～第３層出土遺物
図14　石器

表　目　次

表１　鋤溝計測表
表２　石器計測表
表３　掲載遺物一覧表

第１章　調査に至る経過

貝塚市森474－2他地内における病院建設工事にあたり平成13年１月25日埋蔵文化財発掘届出書が提出された。当該地は一部が中世の集落跡として周知されている森下代遺跡の範囲内にあたる。

開発地周辺では、遺跡内の多くが市街化調整区域であるため農地が多く残り、調査例は少ない。しかし、個人住宅建設に伴なう小調査が中心であるものの、溝、鋤溝などの中世の遺構が確認されているため、確認調査を行うこととなった。

確認調査は平成13年５月21日から平成13年５月24日にかけて市教育委員会が実施した。

調査は建物建設予定部分に第１区（1.5m×11.5m）、第２区（２m×13m）、第３区（1.5m×15m）、第４区（1.5m×9.5m）、第５区（1.5m×5.6m）、第６区（1.5m×５m）、第７区（1.5m×3.5m）の合計101.15㎡の調査区を設定し、実施した。

確認調査の結果、第２層～第４層、第５層（第２区、第５区の北端で確認）の４層の遺物包含層を確認した。遺構は、排水溝２条、土坑１基、鋤溝（南北方向８条、東西方向14条）を良好な状態で検出した。これらは集落遺構の一部と考えられる。また、遺物は須恵器（古代）、瓦（古代～中世）、瓦器、土師器（中世）が出土した。

この調査結果から開発地内全域で遺構が広がっていること、遺跡の範囲が広がることが判明したため、遺跡発見届出書の提出を求め、森下代遺跡の範囲拡大を行った。

このような成果を受け、医療法人永和会　貝塚サナトリウムとの協議を重ねた結果、遺構、遺物包含層を検出した建築部分の範囲2,005㎡について発掘調査を実施することで合意し、６月12日に覚書を交わした。

調査は北東側既設建物撤去の関係で、調査区西側約３分の２の面積を先行して掘削、建物撤去後に残り３分の１を調査し、地山上面の遺構検出の時点で全面調査することとなった。

調査期間は平成13年６月13日より８月31日にかけてである。

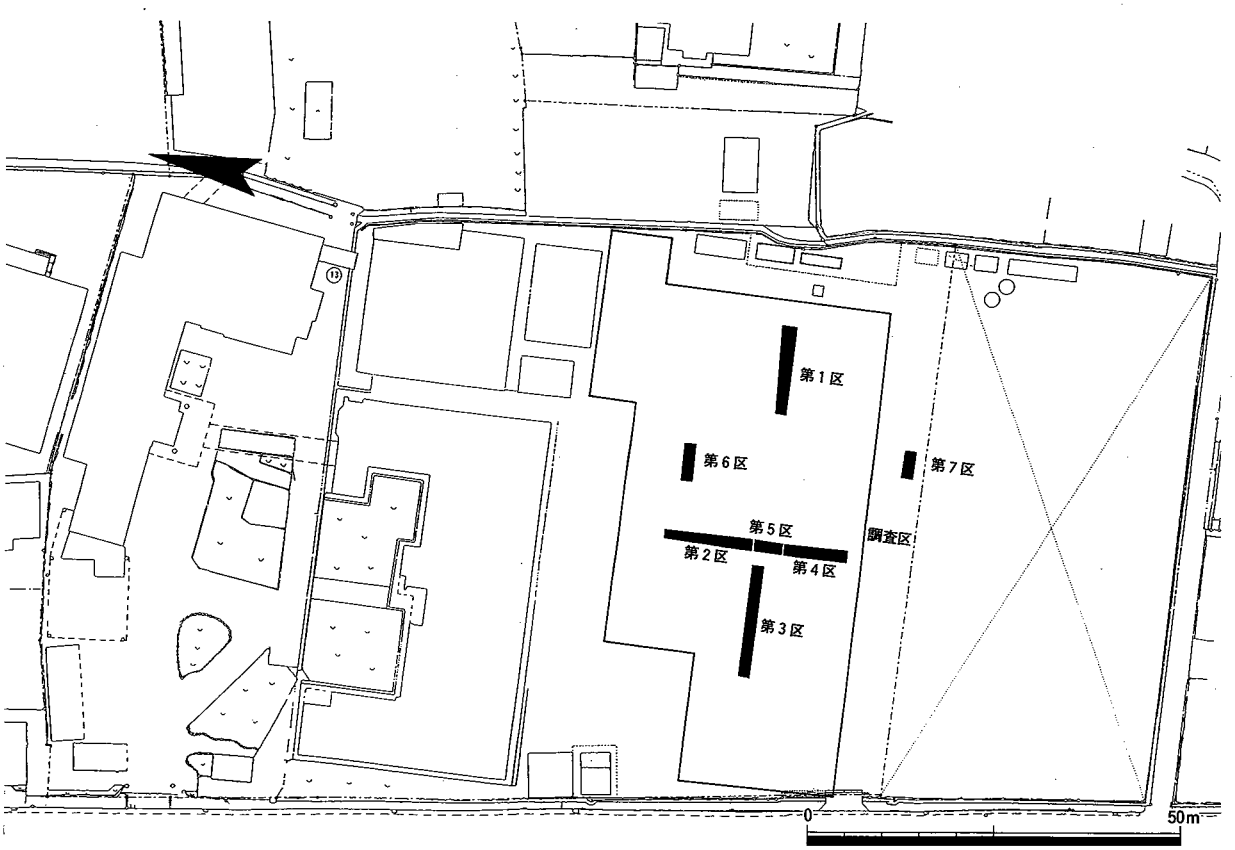
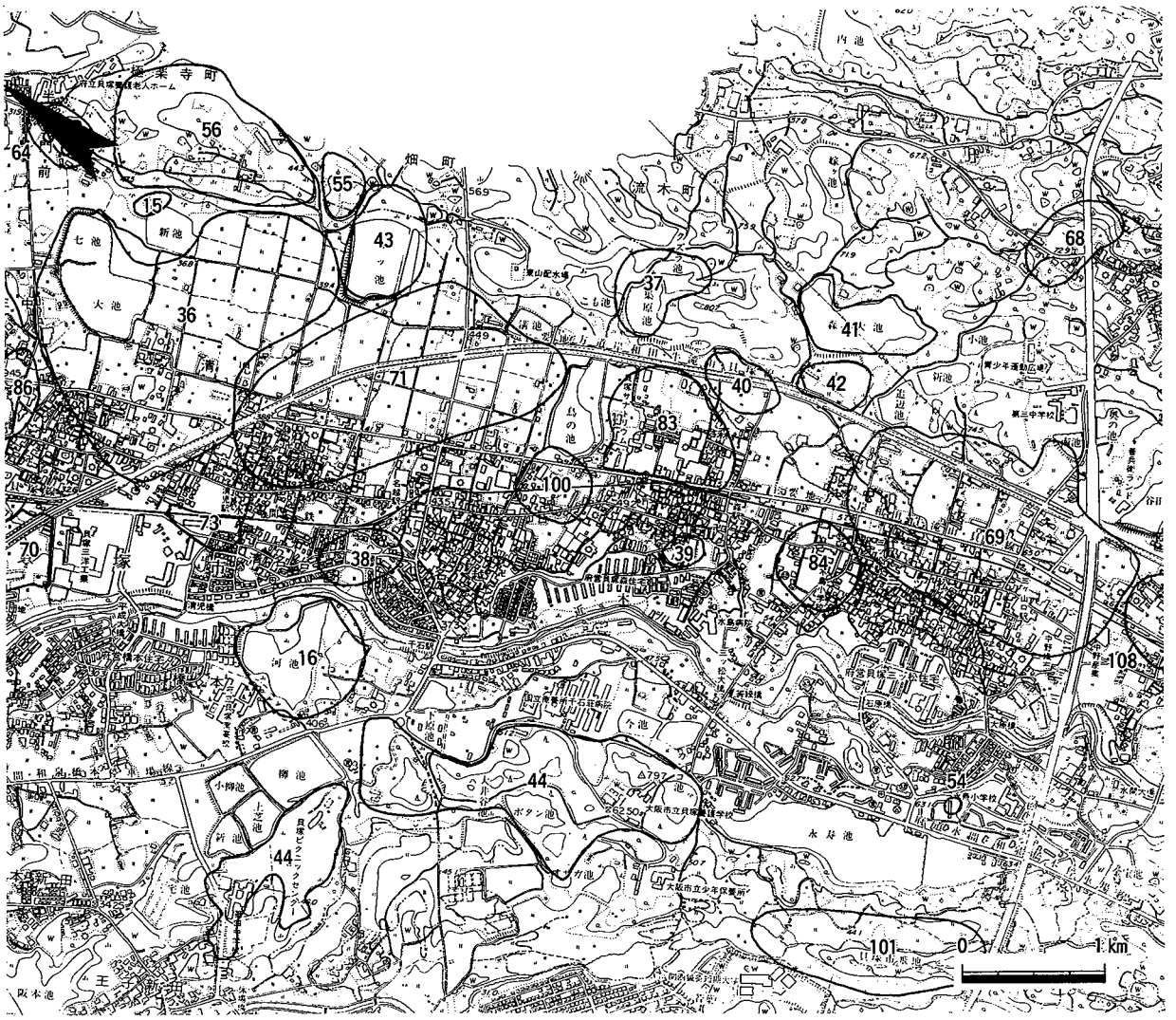


図１　確認調査位置図



15麻生中新池遺跡　16河池遺跡　36清児遺跡　37集原池遺跡　38高井天神廃寺・高井城跡　39森城跡　40森Ｂ遺跡　41森ノ大池遺跡　42森Ａ遺跡　43二ツ池遺跡　44千石堀城跡　54三ツ松遺跡　55槍ケ谷城跡　56半田遺跡（清児地区）　64海岸寺山遺跡　68三ケ山遺跡　69三ケ山西遺跡　70石才南遺跡　71名越遺跡　73名越西遺跡　83森下代遺跡　84三ツ松北垣外遺跡　86麻生中出口遺跡　100鳥の池西遺跡　101白地谷遺跡　108水間二ノ戸遺跡

図２　貝塚市遺跡分布図（部分）

第２章　位置と環境

森下代遺跡は貝塚市のほぼ中央部、大字「森」に所在し、近木川右岸の段丘上に位置する。現状標高49～50mである。東山丘陵から近木川方向に数多くの開析谷が伸び、谷をせき止め、ため池を造り農業用水として利用されている。

本遺跡は平成３年に民間開発により遺跡として登録された。遺跡範囲は東西270m、南北400mである。遺跡内の多くが農地であるが、近年、住宅開発が進んでいる地域である。

本遺跡南には観音信仰で知られる水間寺があり、約100m西側に水間街道が通り、近くには明治時代に森ノ大池に近い丘陵部から移動された森稲荷神社がまつられている。

周辺の遺跡としては北に奈良時代～平安時代の散布地である清児遺跡、中世の散布地である名越遺跡、古墳時代～近世の集落跡である名越西遺跡、中世の集落跡である鳥の池西遺跡、東には飛鳥時代、奈良時代の須恵器窯が推定されている集原池遺跡、南東には中世、近世の散布地である森Ａ遺跡、中世の散布地である森Ｂ遺跡、平安、中世の散布地である森ノ大池遺跡、中世の集落跡である三ツ松北垣外遺跡、中世の散布地であり近年の調査で縄文土器、石器が出土している三ヶ山西遺跡と多くの遺跡が存在する。

これらの遺跡のほか、中世末期に紀州根来寺の根来衆の勢力下となって多くの城が築かれた。本遺跡周辺では、北に高井城跡、西に積善寺城跡、森城跡、南に三ケ山城跡、近木川を挟んで西に千石堀城跡など多くの城跡が残る。

本遺跡における従前の調査は８件であり、住宅建設に伴なう調査のため、調査面積は限られている。

平成５年～平成７年の調査では３層の遺物包含層を確認し、中世の遺物が出土した。

調査区の南東部では２件の調査が行われており、平成10年度の調査で２層の中世の遺物包含層を確認し、地山上面にて溝２条、鋤溝１条を検出した。そのうちの溝１条は古代に遡る可能性の高い溝である。

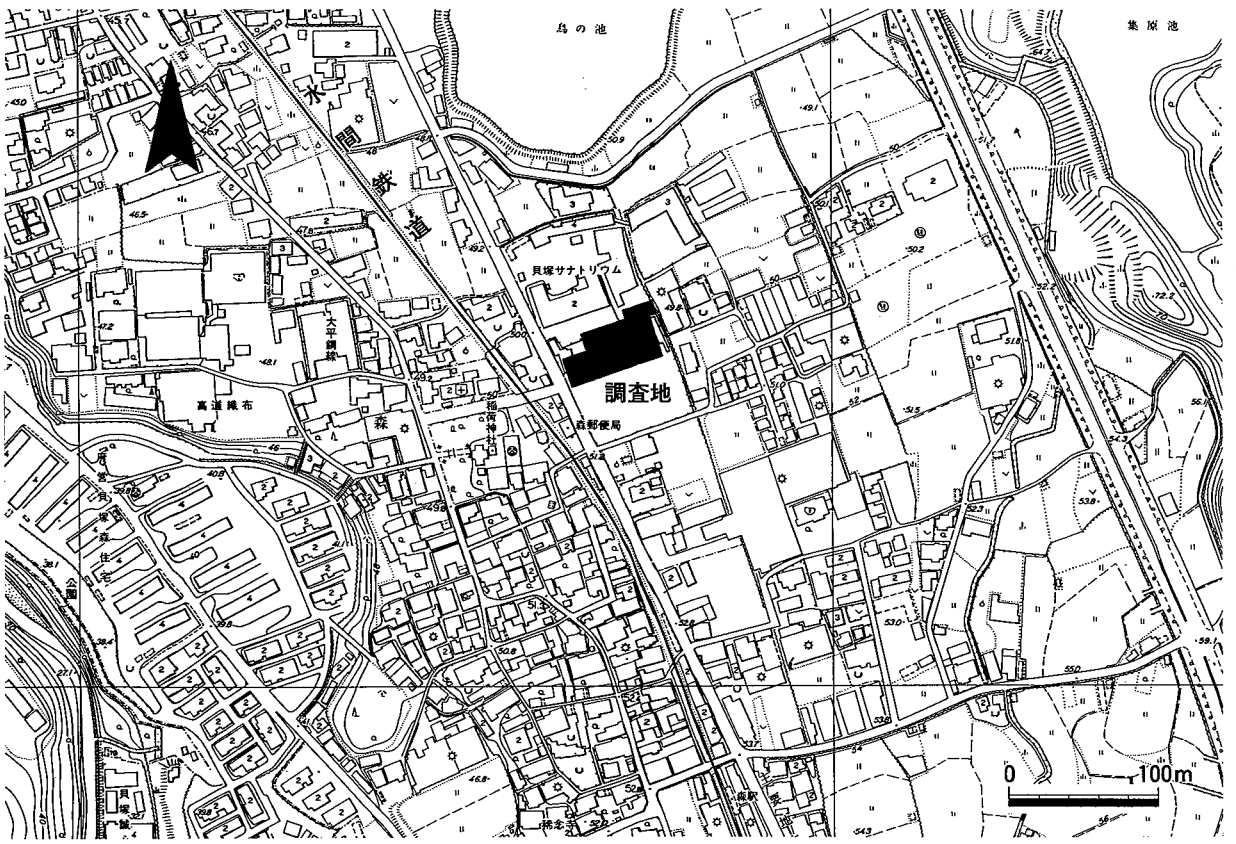


図３　調査地位置図

平成11年度の調査では３層の中世の遺物包含層を確認し、溝４条を検出した。１条は自然流路であるが、ほか３条は北－南方向に流れる溝であり、従前の調査で検出した溝の中では流れる方向が異なる。

これらの結果から中世を中心とする耕作地、集落の広がりが推定される成果を得ている。本遺跡における調査の状況は以上のようなものである。本遺跡において今回のような大規模な開発ははじめてである。

参考文献

大阪府教育委員会1984『森Ａ・Ｂ遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

大阪府教育委員会1985『森Ｂ遺跡発掘調査概要・Ⅱ』

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1988『都市計画道路貝塚中央線建設に伴なう　清児遺跡－発掘調査報告書－』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第31輯

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1991『三ヶ山西遺跡－主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴なう発掘調査報告書－』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第62輯

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1994『三ヶ山西遺跡Ⅱ－主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴なう発掘調査報告書－』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第81輯

（財）大阪府文化財調査研究センター1998『貝塚東山丘陵遺跡群』

貝塚市教育委員会1989『名越西遺跡発掘調査概報』貝塚市埋蔵文化財報告第17集

貝塚市教育委員会1999『三ヶ山西遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第47集

貝塚市教育委員会1999『貝塚市遺跡群発掘調査概要21』貝塚市埋蔵文化財調査報告第53集

貝塚市教育委員会2000『貝塚市遺跡群発掘調査概要22』貝塚市埋蔵文化財調査報告第54集

第３章　調査成果

１．調査の概要

調査は、建設部分および浄化槽設置により破壊を受ける部分、2,005㎡について調査区を設定した。調査は北東側既設建物撤去の関係で、調査区西側約３分の２の面積を先行して掘削、建物撤去後に残り３分の１を調査することとなった。調査区は国家座標Ｘ＝－175.740、Ｙ＝－56.610を基準にして５ｍ×５ｍの区画、東西方向に14区画（Ａ～Ｎ）、南北方向に13区画（１～13）を設定した。

調査は、確認調査における遺物包含層第２層、第３層を機械で掘削し、遺物包含層第４層上面、遺物包含層第５層上面、地山上面の３面で遺構検出を実施した。

先行した西側３分の２の調査で第４層上面遺構検出、第５層上面の遺構検出、遺構掘削を終えた時点で、残り東側３分の１の調査部分において機械掘削を開始し、第４層上面遺構検出を行った。第５層上面での遺構検出は、第５層が調査区中央部に残るのみであったため、調査区の西側では地山上面で遺構検出を行っていた。東側３分の１の調査部分は第５層が堆積しない部分であったので調査区全面において地山上面の遺構検出を実施した。地山上面で遺構検出をした際に、第５層が調査区中央部に残る部分が見られたので、サブトレンチを設定し確認を行った。結果、第５層は遺物包含層ではなく、遺構埋土（SD－2001）であることが判明し、実質の遺構検出面は第４層上面、地山上面の２面となった。

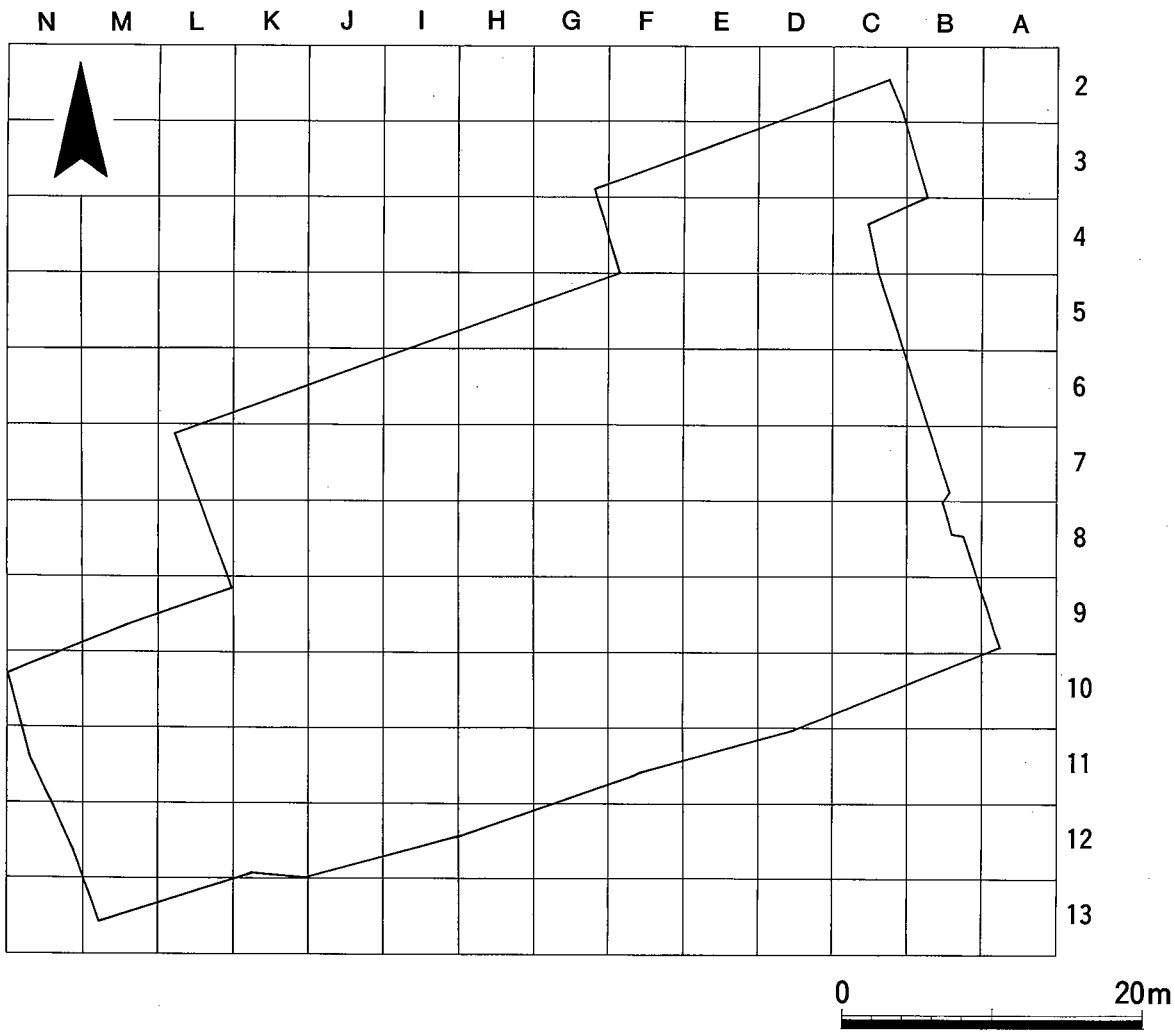


図４　調査区地区割図

遺構は各層上面で良好に検出した。調査区の一部では後世の撹乱を受けている部分も存在したが、ほぼ全面において鋤溝を中心として溝、柱穴、土坑を検出した。

2．基本層序（図５）

調査区は工場の跡地で、現地表面は盛土によって一見平坦であるが、緩やかに北西方向に傾斜しており、比高は0.6mである。耕作土上に盛土を行っているため、水はけが悪い状況であった。

調査区における基本層序は、確認調査により、盛土下に第２層～第５層の遺物包含層が堆積していると認識していた。しかし、前述のように第５層は溝（SD－2001）の埋土であることが判明したため、本調査において確認した遺物包含層は３層である。

盛土は、調査区全域でされており、層厚0.35m～0.95mである。昭和期に工場の敷地として造成する際に行われ

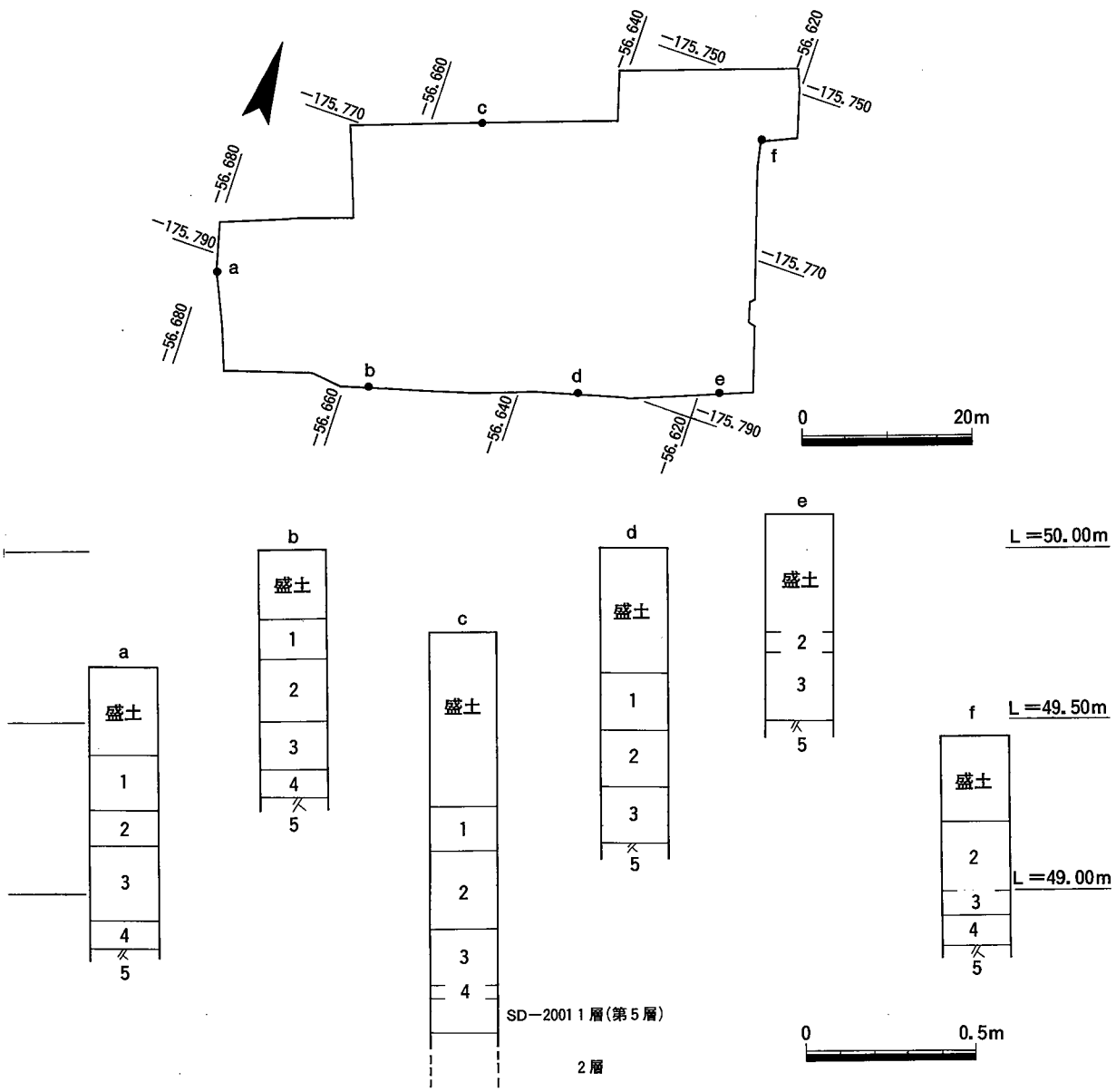


図５　柱状土層図

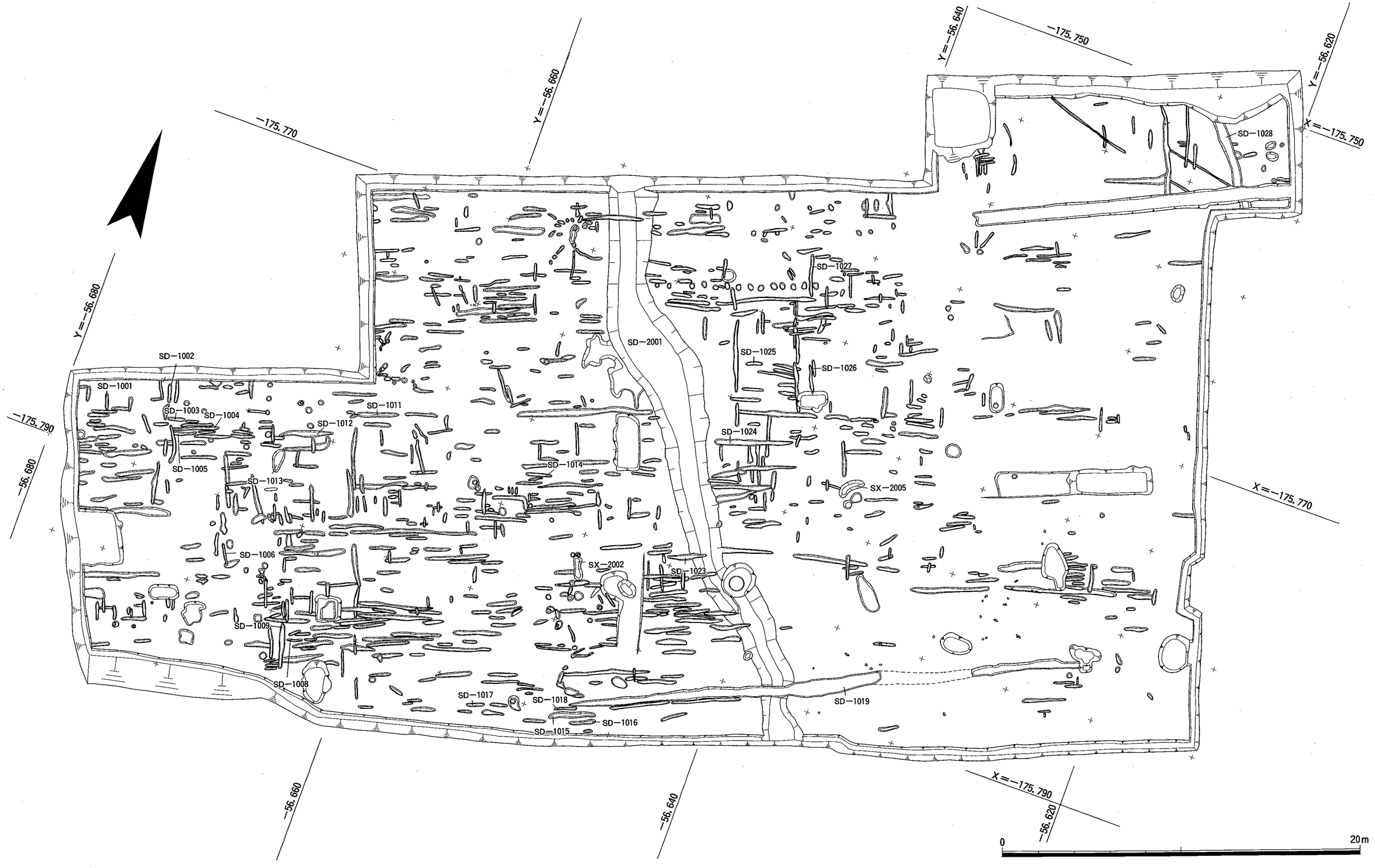


図６　遺構配置図（地山上面）

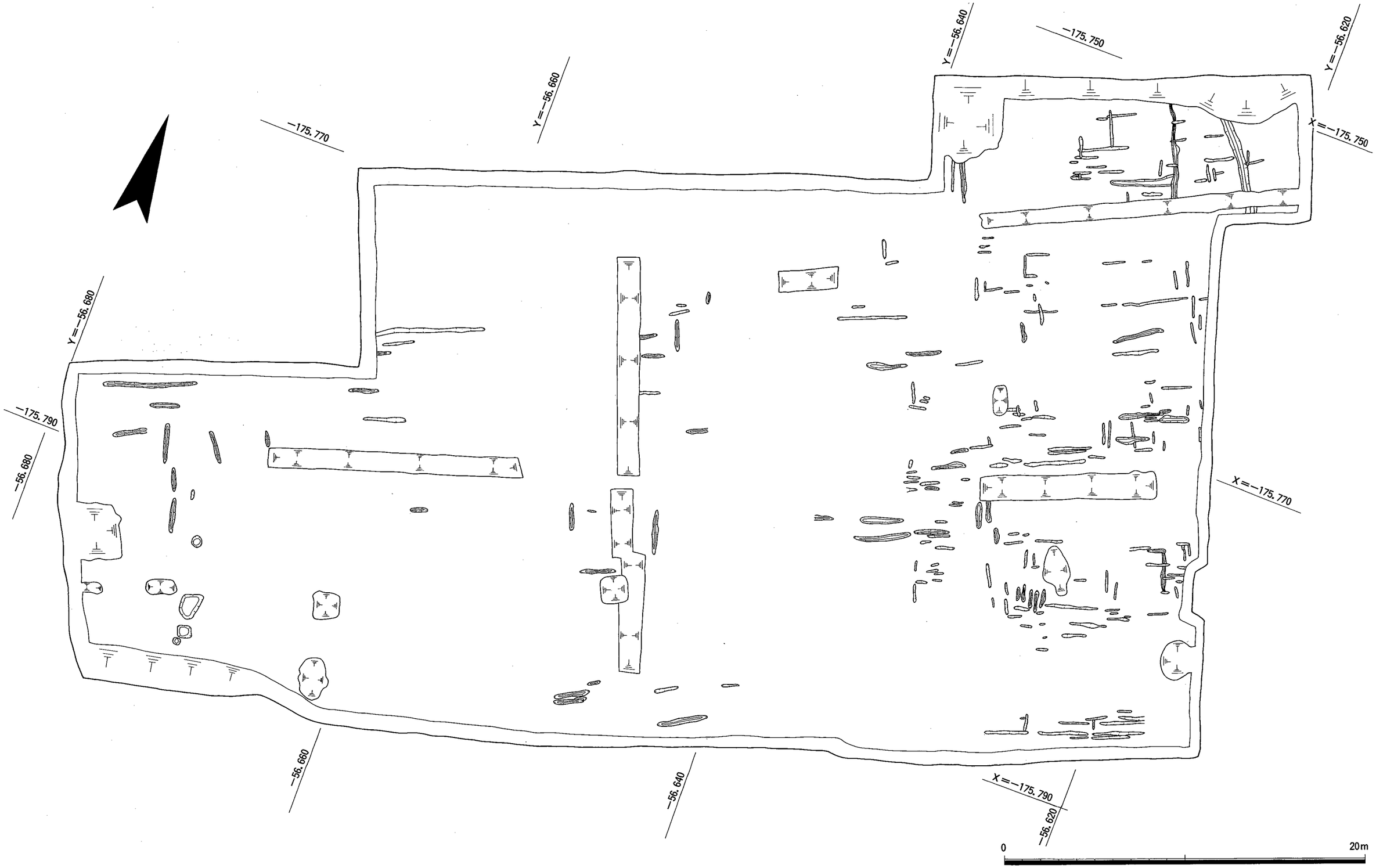


図7　遺構配置図（第4層上面）

たと考えられる。

第１層は耕作土で、調査区東側で工場造成時に削平されているものの、ほぼ全域で確認しており、層厚0.12m～0.2mである。遺物は近世陶磁器が少量含まれる程度である。

第２層はにぶい黄褐色土で層厚約0.18mである。遺物は瓦器椀、近世陶磁器を含む。近世の耕作土層と考えられる。

第３層は黄褐色砂質土で層厚0.1m～0.15mである。第２層と同時に機械掘削を行ったが、須恵器、土師器、瓦器、白磁、フイゴの羽口、鉄滓などの奈良時代～中世の遺物を包含していると考えられ、また、少量ではあるが縄文土器の細片が含まれる。

第４層は黄褐色土で層厚0.15mである。調査区北、東南では第４層が存在しない部分もある。第４層の存在しない部分はＢ－３区、Ｃ－２～３区、Ｄ－２～３区、Ｂ～Ｅ－10区、Ｅ・Ｆ－11区である。結果として、地山上面で検出した遺構の中には第４層上面で検出されるべき遺構も、一部含まれる。遺物は、縄文土器、須恵器、土師器、緑釉陶器、青磁、瓦器等が出土した。縄文土器は細片で上層同様に出土量は極めて少ない。平安時代を中心として飛鳥時代～中世の遺物が出土している。

地山は、明黄褐色土で調査時は第６層としていたが、確認調査における遺物包含層第５層が、溝の埋土と判明したため、この報告では第５層とした。地山面は標高49m～48.5mで、南から北に緩やかに下っている。

３．検出遺構（図６、７）

検出遺構のほとんどが耕作にかかわる遺構である。地山上面、第４層上面ともに鋤溝を多く検出した。以下、各遺構面の遺構の概要を示す。

地山上面（図６）

鋤溝を中心として溝、排水溝、土坑を検出した。耕作に伴なう遺構がほとんどである。柱穴も検出しているが、後世に削平を受けた可能性があり、建物の復元ができない。

溝

SD－2001（図８、図版５～７）

調査区の中央部で検出した溝である。やや西に湾曲しながら南東－北西方向に流れ、最大幅3.5m、深さ1.1mである。

埋土は上層より、にぶい黄褐色土（１層、10YR5／3)、にぶい黄褐色土細砂混じり土（２層、10YR5／3)、にぶい黄褐色礫（３層、10YR4／2)、にぶい黄褐色細砂～粗砂（４層、10YR4／2）である。遺物は弥生土器が１層、２層、４層から、石鏃２点は１層、３層から出土した。１層最上層部分では瓦器細片が出土しているが、本溝埋没後、後世の耕作により混入した可能性が高い。

本溝が掘削された当時は４層の状況から水流がみられ、３層の時期に地山に含まれる礫が多く削り出されて堆積し、溝の深さは半分以下になったと考えられる。その後、埋没が進み１層の時期にいたっては滞水状態となり溝としての機能が失われたと考えられる。

出土遺物には弥生時代中期～後期の時期幅が見られる。このことから、本溝は弥生時代中期に使用されていた可能性があり、弥生時代後期に埋没したと考えたい。

しかし、問題点として、出土遺物がほとんど摩滅を受けていないこと、３層の時期に埋没が進んだ時点で溝の機能が失われた以降も各層から遺物が出土していることがあげられる。弥生時代後期に弥生時代中期の遺物包含層が溝の水流によって遺物を削り取られ、溝に遺物が含まれた可能性も否定できない。

SD－1013

本溝はＬ－10区にて検出した。確認調査時に検出した溝であり、長さ1.35m、幅0.45m、深さ0.09mである。埋土は黄褐色土で、排水溝の一部であり溝の方向もはっきりしない。遺物は中世の土師器が出土している。耕作に伴なって掘削されたと考えられる。埋土の状況から一時的に掘削した排水溝と考えられる。遺構埋没の時期は出土遺物から中世と考えられる。

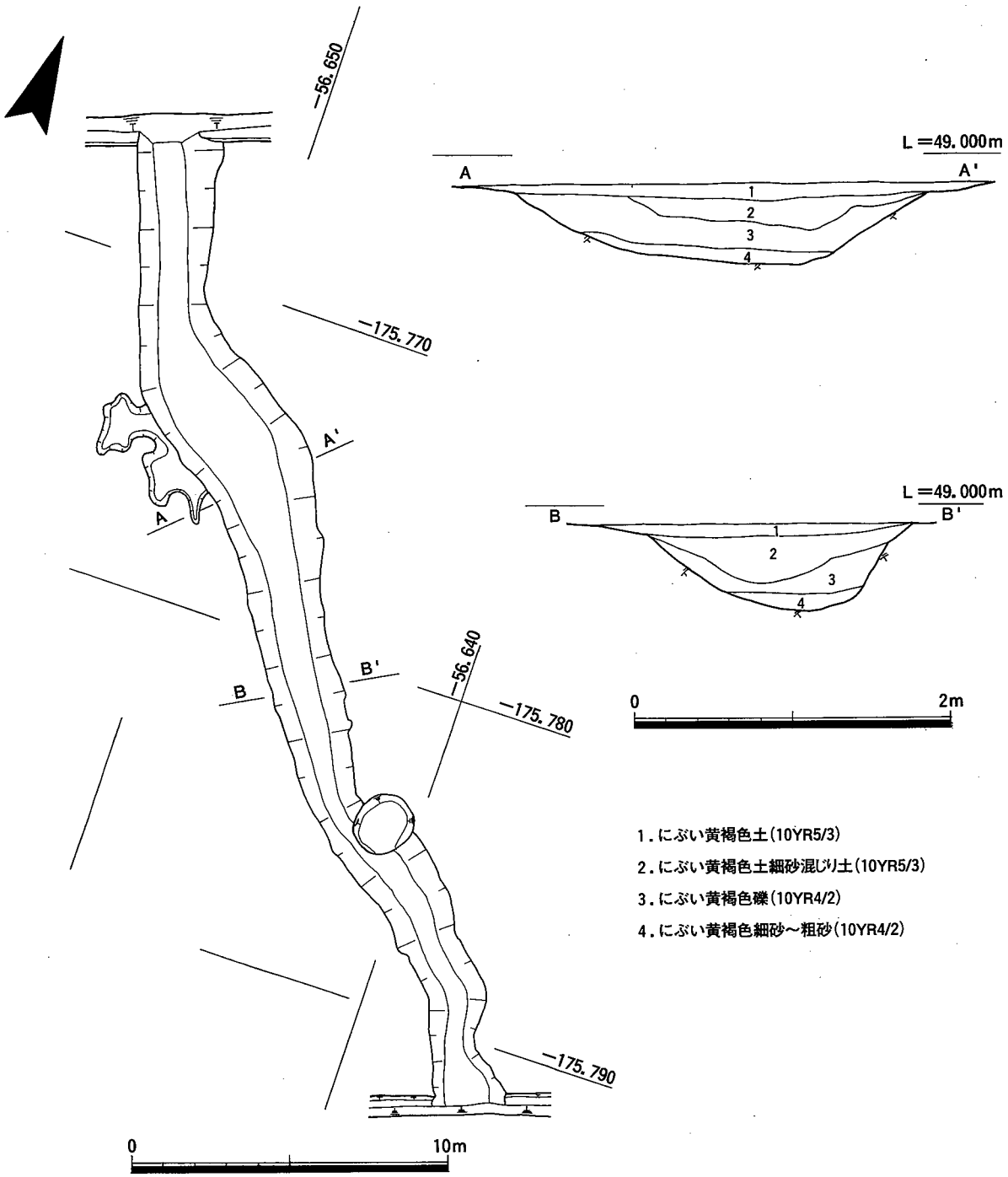


図8　SD−2001平・断面図

SD−1019（図版7、8）

本溝はE−10、F−10、11、G・H−11区にて検出した。埋土は灰褐色土で、検出長17.85m、幅1.0m、深さ0.12mである。遺物は瓦器、土師器が出土している。北東−南西方向の中世の鋤溝と平行しており、中世に掘削された耕作に伴う排水溝と考えられる。

SD−1028（図9、図版8、10）

本溝はC−3区にて検出した。長さ5m、幅0.5m、深さ0.06mである。埋土は黄褐色土で、遺物は黒色土器、土師器、瓦器が出土した。溝の埋没時期は、出土遺物から中世と考えられる。

土坑

SX−2002

本土坑はH−10区にて検出した。長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.18mである。埋土はにぶい黄褐色土で、埋土には

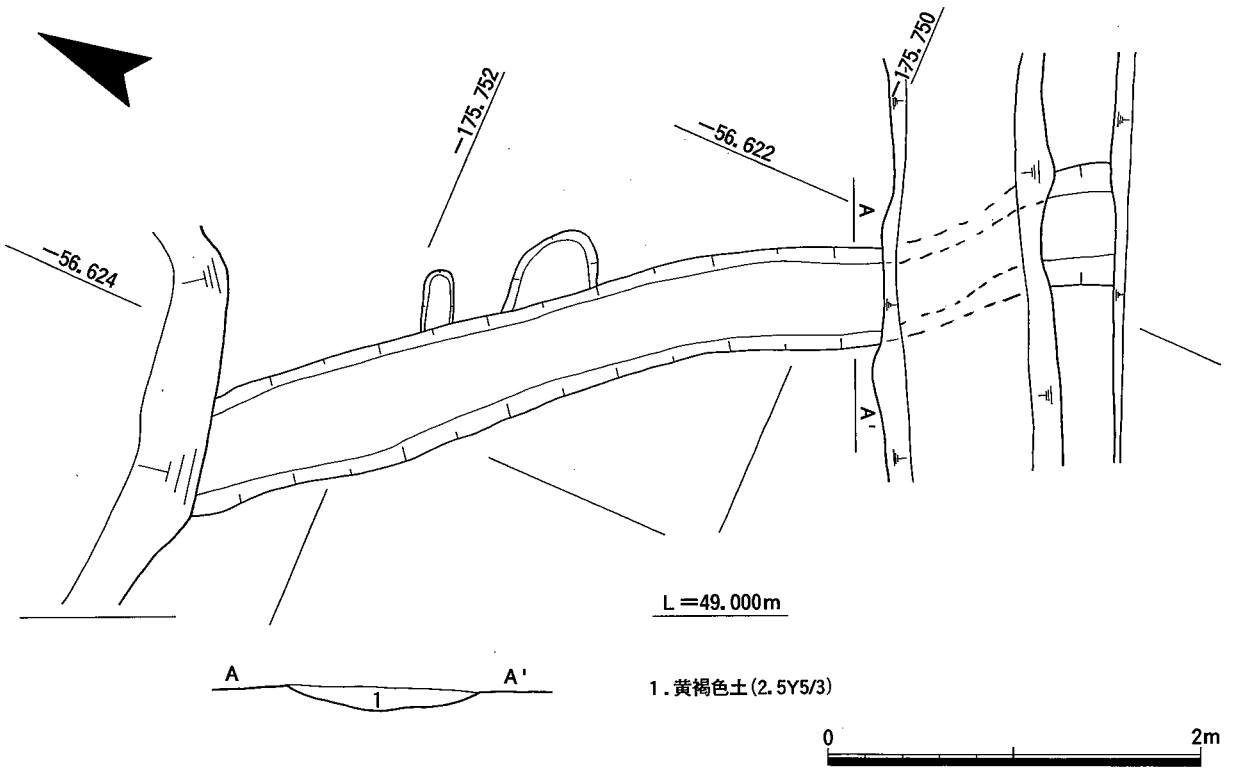


図９　SD−1028平・断面図

焼土、炭灰が含まれるが、土坑の壁、底部分は被熱を受けておらず、自然堆積により埋まっている。

SX−2005

本土坑はＦ－８区にて検出した。長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.2mで埋土はにぶい黄褐色土で、SX－2002と同様の性格のものと考えられる。遺物は焼土が出土しており、自然堆積により埋まり人為的なものと考えがたい。

鋤溝群（図版４）

Ｅ－30°－Ｎ振った南西－北東方向とそれに直交するＮ－20°－Ｗ振った北北西－南南東方向のもの２種類が確認され、前者の方が多い。埋土は黄褐色土（第４層）である。部分的に第４層が存在しない部分があり、その部分は埋土が第３層となるが鋤溝の方向は同様である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器椀、石器である。主な出土遺物から時期は中世と考えられる。

各鋤溝の主なものについては遺構名、規模、出土遺物等の詳細は表１（18Ｐ）にまとめたのでこちらを参照されたい。

第４層上面（図７）

鋤溝群（図版９、10）

地山上面と方向が同じでＥ－30°－Ｎ振った南西－北東方向とそれに直交するＮ－20°－Ｗ振った北北西－南南東方向のもの２種類が確認できた。埋土は２種類で、上面耕作により黄褐色砂質土（第３層）が中心であり、一部でにぶい黄褐色土（第２層）を確認した。出土遺物は瓦器椀が中心で土師器、須恵器などが出土している。近世の遺物は出土しておらず時期は中世と考えられる。

耕作地として開発されてから鋤溝の方向に変化はみられず、このことから本調査地の区画にほとんど変化がみられないことが明らかとなった。

４．出土遺物

遺構からの出土遺物は少なく、ほとんどが遺物包含層からの出土で、中心はやはり、瓦器椀等の中世の遺物である。しかし、後期の縄文土器、石器が出土しているほか、SD－2001からは弥生土器、石器が出土しており幅広い時代の遺物が出土している。次頁より概要を示す。

SD－2001（図10、図版11、12）

1～6は弥生土器である。

1、3、5、6は4層出土である。

1は復元底部径4.4cmの小形甕の底部片である。3は復元口径23.5cmの脚部を欠失した高杯である。和泉Ⅲ－4様式のものと考えられ、杯部は皿形で口縁部端は平坦である。立ち上り部外面に凹線文を1条施す。脚接合部は円盤充填法によってつくられていたと考えられる。5、6は壺体部片である。5は器壁厚0.7cmで櫛描直線文、波状文を施す。6は器壁厚0.8cmで波状文を施す。

2は2層出土の復元口径17.6cmの甕である。4は1層出土の水差形土器の把手である。断面は2.0cm×1.4cmの隅丸の長方形である。

第4層出土遺物（図11、12、図版13～17）

7、61は緑釉陶器椀である。（図11、図版15）7は復元口径16.4cmである。釉薬は一部ハゲている。口縁部の形態から篠窯産と考えられる。61は緑釉陶器体部片である。器壁厚0.4cmである。

8～15は須恵器である。

8は杯蓋である。破片であるが飛鳥時代のものであろう。9～11は杯蓋である。3点とも扁平で平安時代前期のものと考えられる。9は復元径14.0cm、10は復元径17.0cm、11は59と接合し、復元径16.0cmである。

12は壺底部で復元高台径3.8cmである。13、14は杯身である。13は復元高台径11.2cm、14は復元高台径11.9cmである。ともに平安時代前期のものである。15は鉢底部で復元径10.5cmである。底部は回転糸切り未調整であり、平安時代中期のものである。

16、17は黒色土器A類で10世紀代のものである。16は復元高台径6.2cmである。17は復元高台径7.5cmで、高台断面が逆三角形である。

18は土師器高台付きの杯身である。復元高台径5.0cmで高台は貼付けでナデで仕上げる。

19～27は瓦器椀である。図示できるものは底部片が多く、復元高台径は4.8cm～最大6.9cmで、5cm前後の高台径のものが多い。高台は退化が進んだひも状のものは少なく、断面形態が逆台形あるいは、逆三角形のものである。13世紀代のものが中心でないかと考えられる。

20は復元高台径4.9cmである。21は復元高台径4.8cmである。内面見込み部分のミガキは斜格子状である。22は復元高台径5.0cmである。内面見込み部分のミガキは平行である。23は復元高台径5.0cmである。内面見込み部分のミガキは平行で一部が斜格子状に交差する。24は復元高台径6.9cmである。高台断面は逆台形でしっかりとしたつくりである。25は復元高台径4.8cmである。26は復元高台径4.8cmで高台が比較的扁平である。27は復元高台径5.9cmである。

28～32は瓦器小皿である。28は復元口径7.8cmで口縁端部はナデで仕上げる。29は復元口径8.6cmで口縁端部はナデで仕上げる。30は復元口径8.5cmで口縁端部はナデで仕上げる。31は復元口径9.4cmで内面にミガキを施す。32は復元口径9.2cmで口縁端部はナデで仕上げる。

33は復元高台径6.8cmの白磁碗である。高台は削り出しで露胎である。34は復元口径14.6cmの青磁碗である。龍

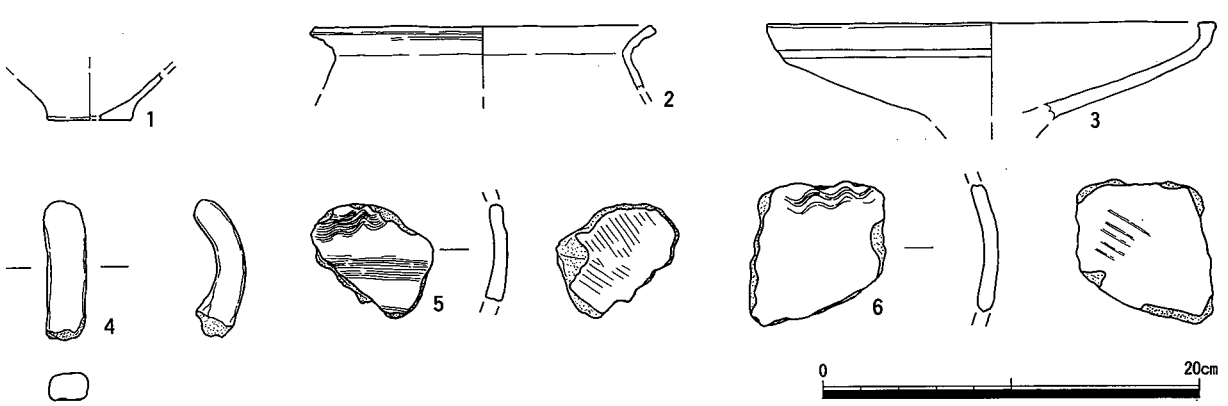


図10　SD－2001出土土器

泉窯系で外面に鎬蓮弁文を施す。

35は鉄滓である。弱いが磁石に反応する。鉄滓表面には気泡が多数見られるほか、小石等の溶着も見られる。鉄滓の状況から製品製作を行う鍛錬鍛冶の過程で出る滓と考えられる。また、細片のため図示できなかったが、フイゴの羽口も２点（図版17）出土しており、このことから周辺で小規模な鍛冶作業が行われていたことが分かる。

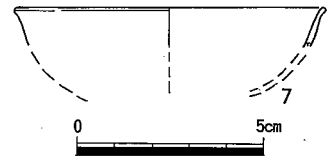


図11　緑釉陶器

第２～第３層出土遺物（図13、図版13、15、17）

36～38、41は瓦器椀である。

36は復元高台径5.6cm、高台断面は逆台形でナデで仕上げる。37は復元高台径7.4cm、高台断面は逆台形でしっかりとしている。38は復元高台径4.4cmである。高台断面は逆三角形でナデで仕上げる。41は復元高台径5.2cmである。高台断面は逆台形である。内面見込み部に斜格子状にミガキが施される。

39、40は白磁碗である。39は復元高台径6.6cmである。高台は削り出しで高くしっかりとつくられており、高台の外面部分に一部施釉されるのみである。内面の見込み部分から体部に曲折する部分には沈線が１条めぐる。40は復元口径16.0cmである。口縁部は玉縁である。

42は復元底部径10.0cmの須恵器壺底部である。底部には藁、稲籾の圧痕らしきものが残る。

60は須恵器杯蓋である。

62、63はフイゴの羽口である。62は器壁厚1.1cmで内面が赤褐色、外面が青灰色で須恵器状に硬化している。溶解は見られないものの先端部に近い破片であると考えられる。63は器壁厚1.7cmで内面黒褐色、外面赤褐色で胎土中に１cmの小石を含み、62とは大きさも胎土も異なる。第４層から出土した鉄滓と関係があるのではないかと考えられる。

64は厚さ2.0cmの丸瓦である。調査区全体で瓦片は２点出土したのみである。凸面に縄目叩き、凹面に布目痕が

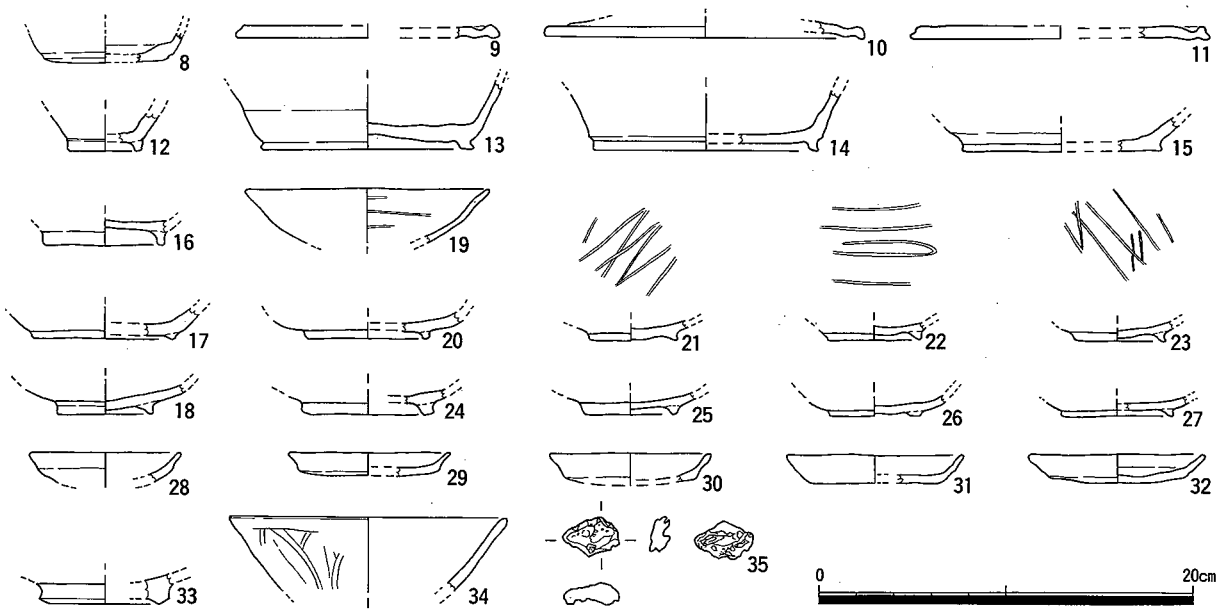


図12　第４層出土遺物

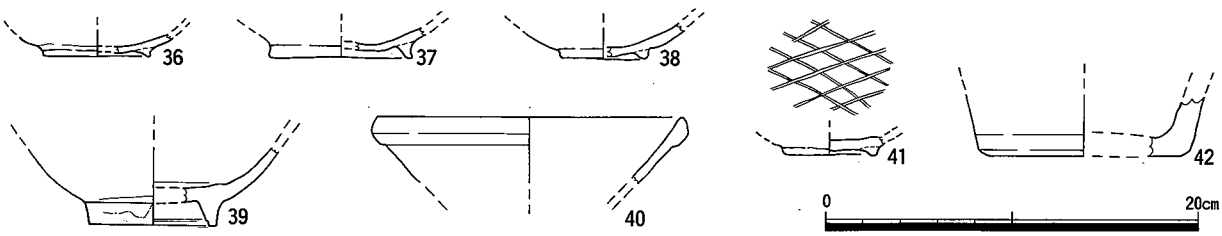


図13　第２～第３層出土土器

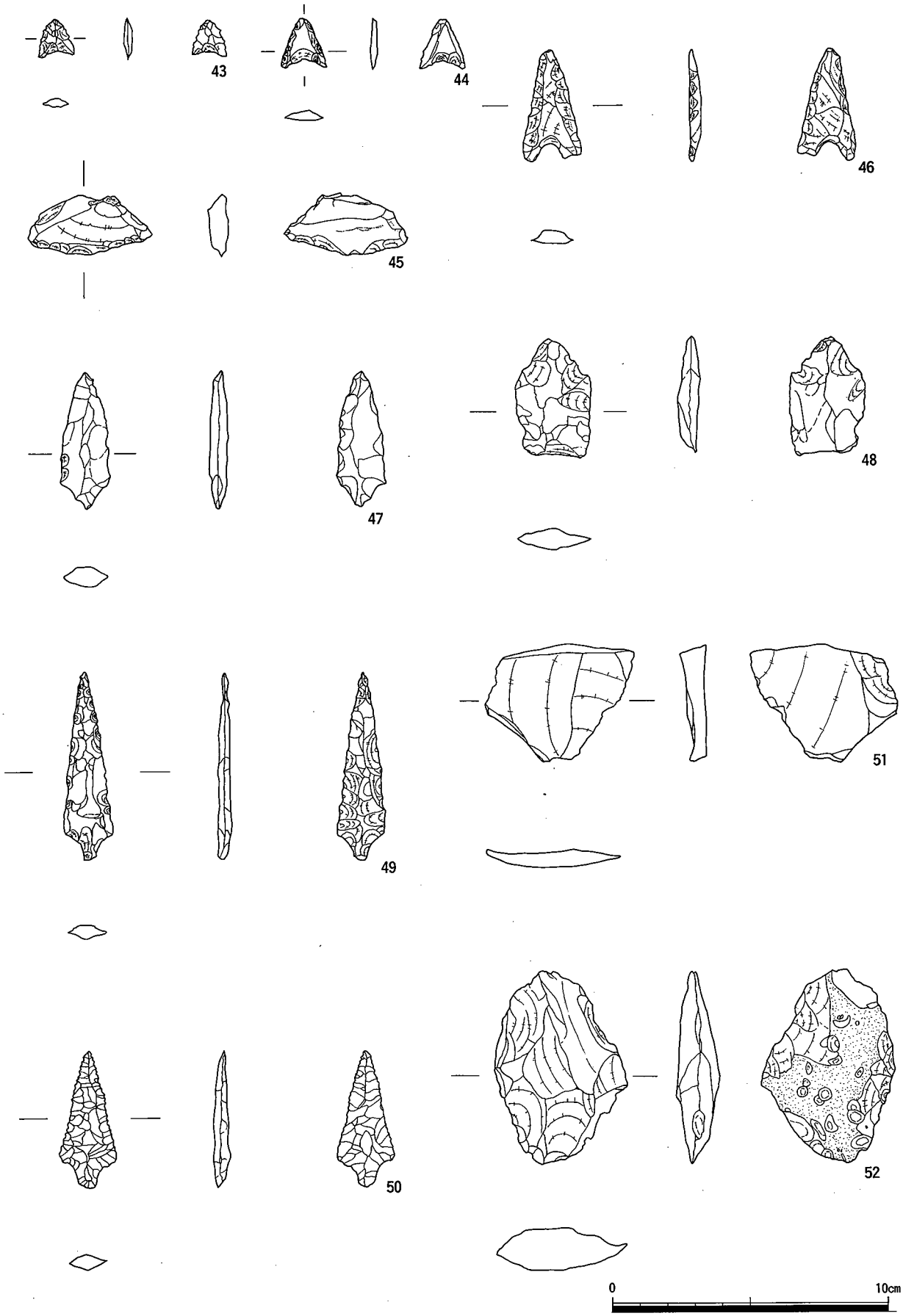


図14　石器

残る。

石器（図14、図版16、17）

石器はサヌカイト製のものが出土しており、製品および比較的大きな剥片について図示し説明することにする。

43、44、46は石鏃、47は尖頭器である。

43、44、46は凹基無茎式である。3点ともに第4層出土である。43は長さ1.2㎝、幅1.3㎝、最大厚0.3㎝である。44は長さ1.7㎝、幅1.7㎝で最大厚0.3㎝である。46は長さ4.0㎝、幅2.1㎝、最大厚0.5㎝で背面は平坦である。両側縁は押圧剥離によって細かい調整がなされている。3点とも縄文時代の石鏃である。

45は横長の剥片を利用した削器である。他の石器より風化が著しく進んでいることから縄文時代中期以前に位置付けておきたい。

47は第2～第3層出土の有茎尖頭器である。長さ5.0㎝、幅1.8㎝、最大厚0.7㎝である。サヌカイト製であるが、石質がほかの石器と異なり加工痕跡が観察しづらい状況であるが、細かい調整により仕上げる。

48は第4層出土の石器未製品である。石鏃の未製品と考えられ、長さ4.2㎝、幅2.7㎝、最大厚0.8㎝である。押圧剥離による調整を行っているが、上端から中ごろにかけての調整であり、下端部については剥離調整が行われていない。製作途中で放棄したのであろうか。

49、50はSD‐2001出土の有茎式石鏃である。49は3層出土で、長さ6.8㎝、幅1.7㎝、最大厚0.5㎝である。先端部は鋭く尖り、先端部から押圧剥離によって細かい調整がされている。50は1層出土で、長さ4.9㎝、幅2.0㎝、最大厚0.6㎝で先端部から茎部まで押圧剥離による細かい調整がされている。49、50はともに弥生時代中期のもので溝内から出土している土器の時期とも合致する。

51はサヌカイト剥片である。目的剥片を得るためにでた剥片と考えられる。52は背面に自然面が残る石核である。

縄文土器（図版11）

53～58は、縄文土器である。53、54、56～58は第4層出土である。55は第2～第3層出土である。比較的残りの良い6点であるが、かなり摩滅を受けており器種を特定できない。時期は後期と考えられる。胎土は粗く2～3㎜程度の砂粒を含む。胎土から河内産の土器であることが判明した。

本調査地で縄文土器と考えられる破片は20点で53～58同様にかなり摩滅を受けており、器種の特定、調整も分かりづらい状況である。

参考文献

寺沢薫・森岡秀人編1990「和泉地域」『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』
大阪府教育委員会1984『森A・B遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
大阪府教育委員会1985『森B遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1988『都市計画道路貝塚中央線建設に伴なう　清児遺跡－発掘調査報告書－』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第31輯
財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1991『三ヶ山西遺跡－主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴なう発掘調査報告書－』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第62輯
財団法人　大阪府埋蔵文化財協会1994『三ヶ山西遺跡Ⅱ－主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴なう発掘調査報告書－』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第81輯
（財）大阪府文化財調査研究センター1998『貝塚東山丘陵遺跡群』
貝塚市教育委員会1989『名越西遺跡発掘調査概報』貝塚市埋蔵文化財報告第17集
貝塚市教育委員会1999『三ヶ山西遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第47集
貝塚市教育委員会1999『貝塚市遺跡群発掘調査概要21』貝塚市埋蔵文化財調査報告第53集
貝塚市教育委員会2000『貝塚市遺跡群発掘調査概要22』貝塚市埋蔵文化財調査報告第54集

表１　鋤溝計測表

遺構名	方　向	地区	長さ	幅	深さ	埋　土	出土遺物
SD－1001	N－20°　－W	N－10	0.65m	0.10m	0.01m	黄褐色土（第４層）	瓦器
SD－1002	N－20°　－W	M－10	1.05m	0.15m	0.02m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1003	E－30°　－N	M－10	0.95m	0.15m	0.02m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1004	E－30°　－N	M－10	2.68m	0.15m	0.02m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1005	E－30°　－N	M－10	1.20m	0.15m	0.01m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1006	E－30°　－N	L－11	0.80m	0.15m	0.01m	黄褐色土（第４層）	瓦器、土師器
SD－1007	N－20°　－W	L－11、12	1.50m	0.15m	0.01m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1008	E－30°　－N	K－12	0.80m	0.12m	0.03m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1009	N－20°　－W	K－12	2.62m	0.15m	0.04m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1010	E－30°　－N	J－11	3.20m	0.40m	0.04m	黄褐色土（第４層）	須恵器
SD－1011	E－30°　－N	K－9	2.30m	0.20m	0.04m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1012	E－30°　－N	L－9	2.08m	0.25m	0.03m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1014	E－30°　－N	I－9	1.50m	0.12m	0.02m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1015	E－30°　－N	H－12	3.05m	0.32m	0.06m	黄褐色砂質土（第３層）	瓦器、土師器
SD－1016	E－30°　－N	H－12	1.50m	0.12m	0.03m	黄褐色砂質土（第３層）	瓦器
SD－1017	E－30°　－N	I－12	1.50m	0.15m	0.03m	黄褐色土（第４層）	土師器、須恵器
SD－1018	E－30°　－N	H－11	1.30m	0.10m	0.02m	黄褐色砂質土（第３層）	瓦器
SD－1020	E－30°　－N	E－10	1.10m	0.12m	0.04m	黄褐色土（第４層）	瓦器
SD－1021	N－20°　－W	E－9	0.60m	0.2m	0.03m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1022	E－30°　－N	F－9	0.85m	0.15m	0.03m	黄褐色土（第４層）	須恵器
SD－1023	E－30°　－N	G－9	2.15m	0.22m	0.07m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1024	E－30°　－N	G－8	5.10m	0.22m	0.04m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1025	E－30°　－N	G－7	1.15m	0.12m	0.04m	黄褐色土（第４層）	土師器
SD－1026	N－20°　－W	G－7	0.97m	0.10m	0.01m	黄褐色土（第４層）	瓦器
SD－1027	N－20°　－W	G－6	2.40m	0.15m	0.07m	黄褐色土（第４層）	土師器

表２　石器計測表

図版遺物番号	登録遺物番号	出土地区	出土遺構	種　類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重　量（g）
43	127	H－11	第４層	石鏃	1.2	1.3	0.3	0.40
44	139	F－9	第４層	石鏃	1.7	1.7	0.3	0.67
45	153	F－6	第４層	削器	4.4	2.1	0.5	7.03
46	157	F－6	第４層	石鏃	4.0	2.1	0.5	3.54
47	33	南　側	第２・第３層	尖頭器	5.0	1.8	0.7	5.56
48	114	H－6	第４層	石鏃未製品	4.2	2.7	0.8	9.55
49	167	G－10	SD－2001、３層	石鏃	6.8	1.7	0.5	5.09
50	169	H－8	SD－2001、１層	石鏃	4.9	2.0	0.6	4.22
51	59	中央部	第４層	剥片	5.5	3.8	1	18.60
52	164	I－11	第４層	石核	7.0	4.8	1.6	45.96

第4章　まとめ

調査の結果、調査区全域で良好な状態で遺構を検出した。以下、時代順に本調査地についてまとめることにする。

縄文時代

包含層から平安時代～中世遺物とともに縄文時代後期土器片やサヌカイト製の石鏃および剥片が出土した。周辺に存在していた縄文時代の遺物包含層が耕作によって撹拌を受けたものと考えられる。周辺の調査においては三ヶ山西遺跡では後世の地層に縄文土器が含まれ、後期後葉の一乗寺K式及び元住山Ⅰ、Ⅱ式土器および、貝殻条痕調整の粗製土器片、晩期終末の刻目突帯文土器片1点が見られる。森B遺跡ではサヌカイト製の石鏃2点が出土しているほか、市内各地でも縄文時代の石器は出土している。

出土遺物の状況から判断して集落は本調査地の南側の三ヶ山西遺跡周辺にあった可能性が高いと考えられる。中世の農地開発によって開墾を受け、細片となった土器や石器についてさらに詳しい観察眼を向けることが必要である。

弥生時代

調査区中央部で弥生時代中期に使用されていた可能性のある溝を検出し、溝内から弥生土器、石鏃が出土した。土器の量は少ない。遺物包含層にも摩滅の激しい細片が含まれている。おそらく縄文時代同様に弥生時代の遺物包含層も存在していた可能性があり、耕作によって撹拌を受けたものと考えられる。

弥生時代の本遺跡周辺の状況は、南東にある森B遺跡で奈良時代及び中世・近世の包含層に混じって弥生時代中期～後期（畿内Ⅳ様式後葉～Ⅴ様式前葉）の土器、サヌカイト製石鏃2点（円基式、凸基有茎式）、不定形刃器1点、剥片数点が出土している。また、本遺跡北では名越西遺跡で、石斧、弥生中期から後期の土器が古墳時代前期の溝内から出土している。南では、三ヶ山西遺跡で遺物包含層第6層から弥生後期の土器が数点出土している。これらはすべて遺物包含層などからの出土であり、遺構が確認されたのははじめてである。弥生時代の集落が周辺で存在した可能性がある。

古墳時代

遺物は全く出土していない。本調査区における古墳時代は空白の時代である。しかし、周辺の遺跡では、北の名越西遺跡で古墳時代前期の溝を検出しており、布留式期の土器や製塩土器が出土している。南では三ヶ山西遺跡で、掘立柱建物2棟、竪穴住居3棟が確認されている。

飛鳥時代～奈良時代

包含層から飛鳥時代と考えられる須恵器杯蓋が数点出土している。また、奈良時代の遺物も若干ながら包含層から出土している。周辺の遺跡では森B遺跡から7世紀の須恵器、8世紀代の奈良時代の土器が出土しており、段状遺構が確認されている。耕作適地を部分的に開墾し、奈良時代に周辺地域で耕地開発がはじまっていたことが判明している。本調査地では遺構は検出されていないが、従前の調査において古代と考えられる溝を検出している例もあり、近接する地点で耕作地あるいは集落が存在する可能性が高い。

平安時代

中世に次いで出土遺物の多い時代である。平安時代の遺物が多く出土したことは本遺跡の特徴といえる。須恵器蓋は細片であるが扁平なもので平安時代前期に位置付けられるものである。また、黒色土器A類椀3点、緑釉陶器の細片2点が出土している。緑釉陶器は、周辺の遺跡では本遺跡と同じ篠窯産のものが清児遺跡で出土して

いる。

出土遺物から集落の存在が推定でき、本調査地では確認されていないが、周辺部で集落あるいは耕作地が、存在した可能性がある。周辺遺跡の森B遺跡では、遺物がほとんど出土しない状況から耕作が行われていなかったと考えられているが、奈良時代のように緩斜面を利用した耕作地ではなく、平坦部分を耕作地として利用したと考えられる。集落についても同様であり、耕作地に近接した地域に集落が移ったため遺物がほとんど出土しないのではないかと考えられる。

鎌倉時代

農地開発により、開墾が進んだものと考えられる。本調査で最も多く出土した瓦器椀も13世紀代のものが多く出土しており、青磁、白磁などの輸入磁器もほぼ同時期のものが出土している。

市内では農地開発が荘園開発によって活発化しており、本調査地も周辺地域と同様の状況であることが明らかとなった。

出土遺物での特徴は、瓦器椀の出土量の割に羽釜などの煮沸具やこね鉢、甕といった瓦質製品がほとんど見られない点である。なぜこのような状況がみられるかについては今後の課題としたい。

室町時代、近世

室町時代の遺物はたいへん少なく、瓦器椀も14世紀代のものはほとんど出土していない。近世の遺物についても同様である。第4層の存在しない部分で検出した鋤溝は、第3層あるいは第2層を埋土とする。時期は中世以降でありこれらの鋤溝方向にも変化は見られない。このことから、中世に開かれた耕作地は、現在まで大きく耕作区画も変更されることなく、継続して耕作地として利用してきたと考えられる。

以上のように今回の調査では縄文～中世までの幅広い時期の遺構、遺物を発見した。縄文時代については、近年の発掘調査で、遺物包含層から縄文土器が出土する事例が増えている。中世の集落として周知されていた本遺跡においても、縄文土器、石器が出土した。このように縄文時代に人々の生活の営みが確認され、市内の縄文時代の状況も少しずつではあるがわかりはじめた。また、弥生時代の遺構を検出したことは、市内南部で弥生時代の遺跡が確認されなかった状況をくつがえす成果となった。

時代幅の広いことがわかった今回の調査であったが、それぞれの発見は各時代の入り口を示したにすぎない。本調査成果を踏まえて周辺部の調査に臨む必要がある。

表3　掲載遺物一覧表

図版遺物番号	登録遺物番号	遺　物　名	遺構・層
1	168	弥生土器甕底部	ＳＤ－2001、4層
2	170	弥生土器甕口縁部	ＳＤ－2001、2層
3	171	弥生土器高杯	ＳＤ－2001、4層
4	165	弥生土器水差形土器把手	ＳＤ－2001、1層
5	172	弥生土器壺	ＳＤ－2001、4層
6	166	弥生土器壺	ＳＤ－2001、4層
7	185	緑釉陶器椀	第4層
8	162	須恵器杯身底部	地山上面
9	72	須恵器杯蓋	第4層
10	71	須恵器杯蓋	第4層

図版遺物番号	登録遺物番号	遺　物　名	遺構・層
11	117	須恵器杯蓋	第４層
12	18	須恵器壺底部	側溝４
13	73	須恵器杯身	第４層
14	74	須恵器杯身	第４層
15	121	須恵器鉢底部	第４層
16	152	黒色土器Ａ類椀底部	第４層
17	76	黒色土器Ａ類椀底部	第４層
18	82	土師器椀底部	第４層
19	86	瓦器椀	第４層
20	51	瓦器椀底部	第４層
21	133	瓦器椀底部	第４層
22	122	瓦器椀底部	第４層
23	55	瓦器椀底部	第４層
24	56	瓦器椀底部	第４層
25	54	瓦器口縁部	第４層
26	44	瓦器椀底部	第４層
27	91	瓦器椀底部	第４層
28	43	瓦器小皿	第４層
29	124	瓦器小皿	第４層
30	120	瓦器小皿	第４層
31	136	瓦器小皿	第４層
32	161	瓦器小皿	地山上面
33	150	白磁碗	第４層
34	53	青磁碗	第４層
35	46	鉄滓	第４層
36	11	瓦器椀底部	第２・第５層
37	6	瓦器椀底部	第２・第３層
38	5	瓦器椀底部	第２・第３層
39	1	白磁碗底部	第２・第３層
40	29	白磁碗口縁部	第２・第３層
41	8	瓦器椀底部	第２・第３層
42	37	須恵器壺底部	第２・第３層
43	127	石鏃	第４層
44	139	石鏃	第４層
45	153	削器	第４層
46	157	石鏃	第４層
47	33	尖頭器	第２・第３層
48	114	石鏃未製品	第４層
49	167	石鏃	ＳＤ－2001、３層
50	169	石鏃	ＳＤ－2001、１層
51	59	剥片	第４層
52	164	石核	地山上面
53	178	縄文土器	第４層
54	196	縄文土器	第４層
55	176	縄文土器	第２・第３層
56	182	縄文土器	第４層
57	173	縄文土器	第４層
58	193	縄文土器	第４層
59	35	須恵器杯蓋	第２・第３層
60	151	須恵器杯蓋	第４層
61	126	緑釉陶器	第４層
62	4	フイゴの羽口	第２・第３層
63	31	フイゴの羽口	第２・第３層
64	14	瓦	第２・第３層

報告書抄録

ふりがな	もりしもだい いせきはっくつちょうさがいよう
書名	森下代遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第61集
編集者名	三浦　基
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号　TEL 0724（23）2151
発行年月日	2002年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりしもだい いせき 森下代遺跡	おおさか ふ かいづか し もり 大阪府貝塚市森	27208	83	34度 25分	135度 22分	2001年 6月13日 ～ 2001年 8月31日	2005㎡	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
もりしもだい いせき 森下代遺跡	集落跡	弥生時代 中世	鋤溝 溝 土坑	瓦器 土師器 須恵器 弥生土器 縄文土器	

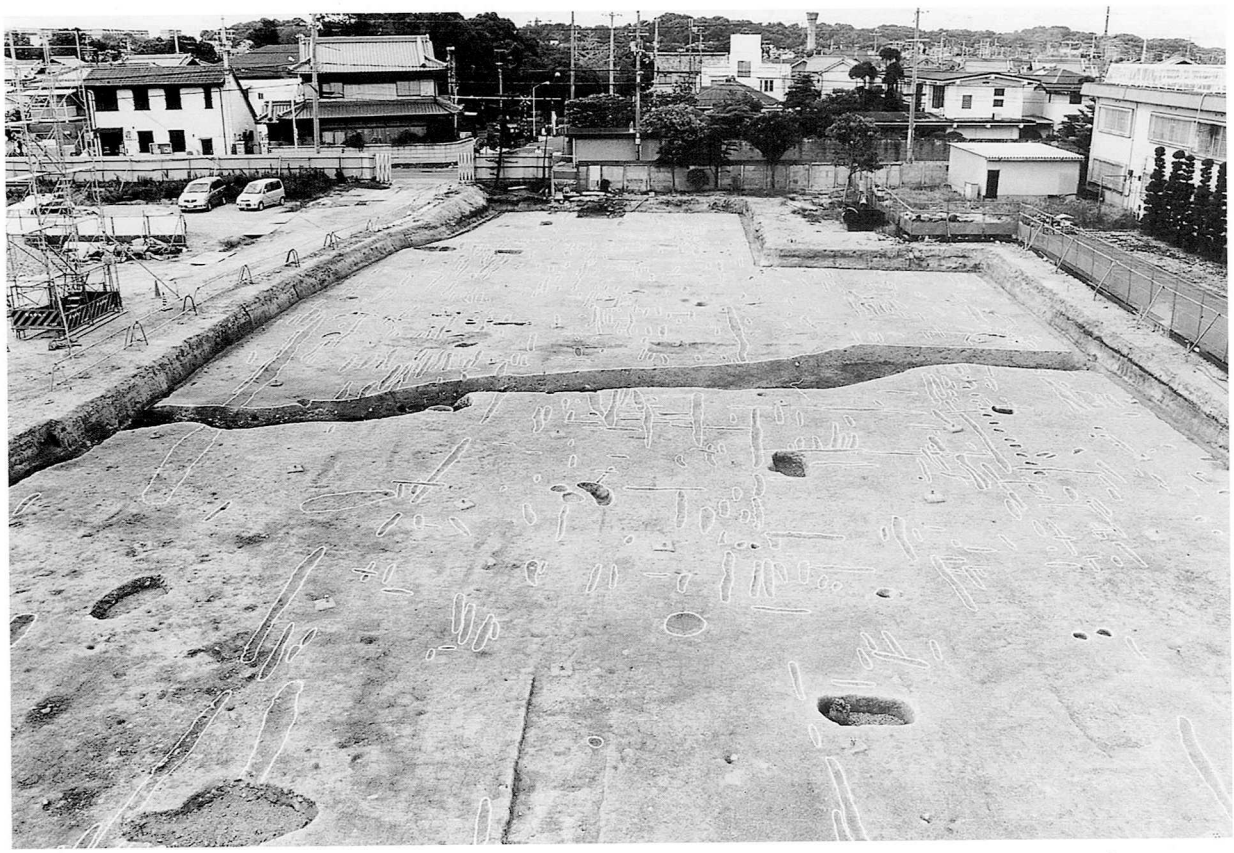
図　　版

現地公開風景（平成13年８月27日、28日実施）

図版1　検出遺構

航空写真　　右斜め下が北

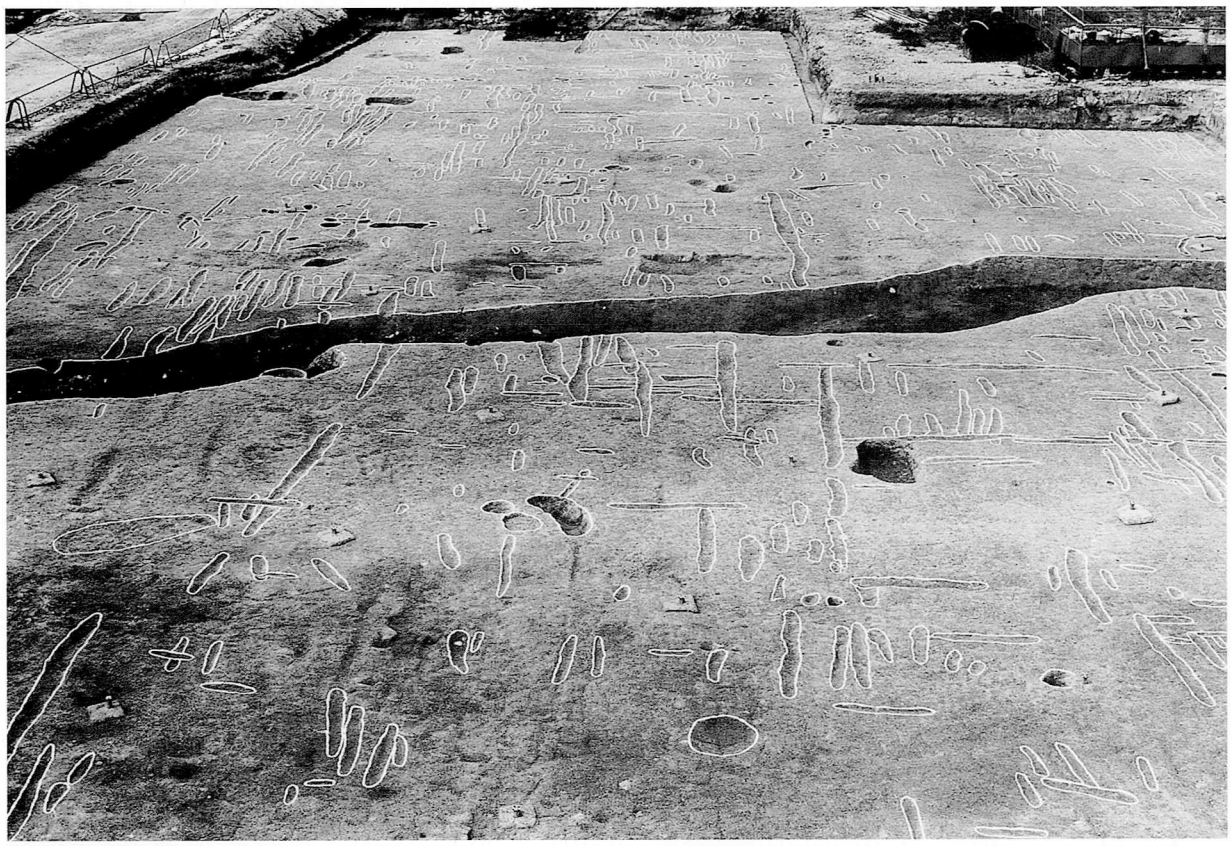
図版2　検出遺構



1．地山上面　検出遺構　西半部　　東北より

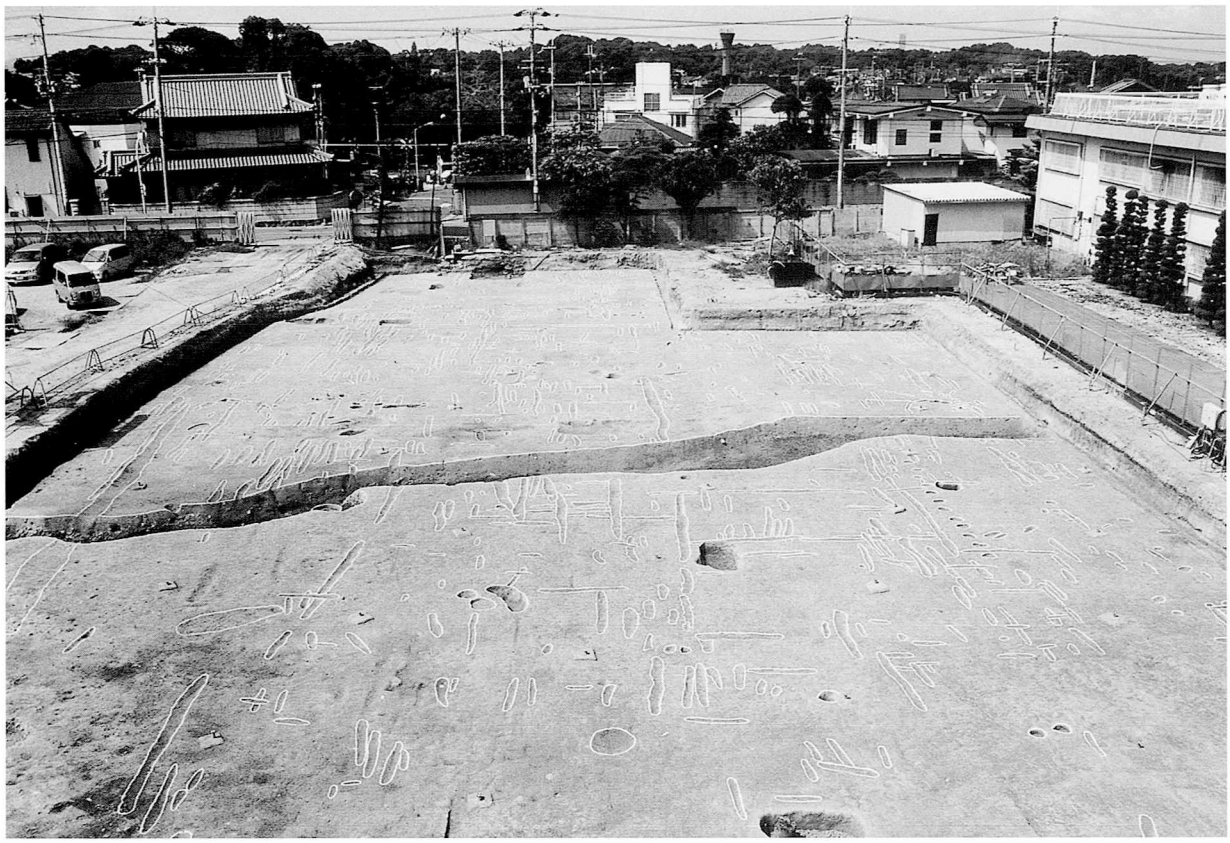
2．同　　上　　東南より

図版3　検出遺構

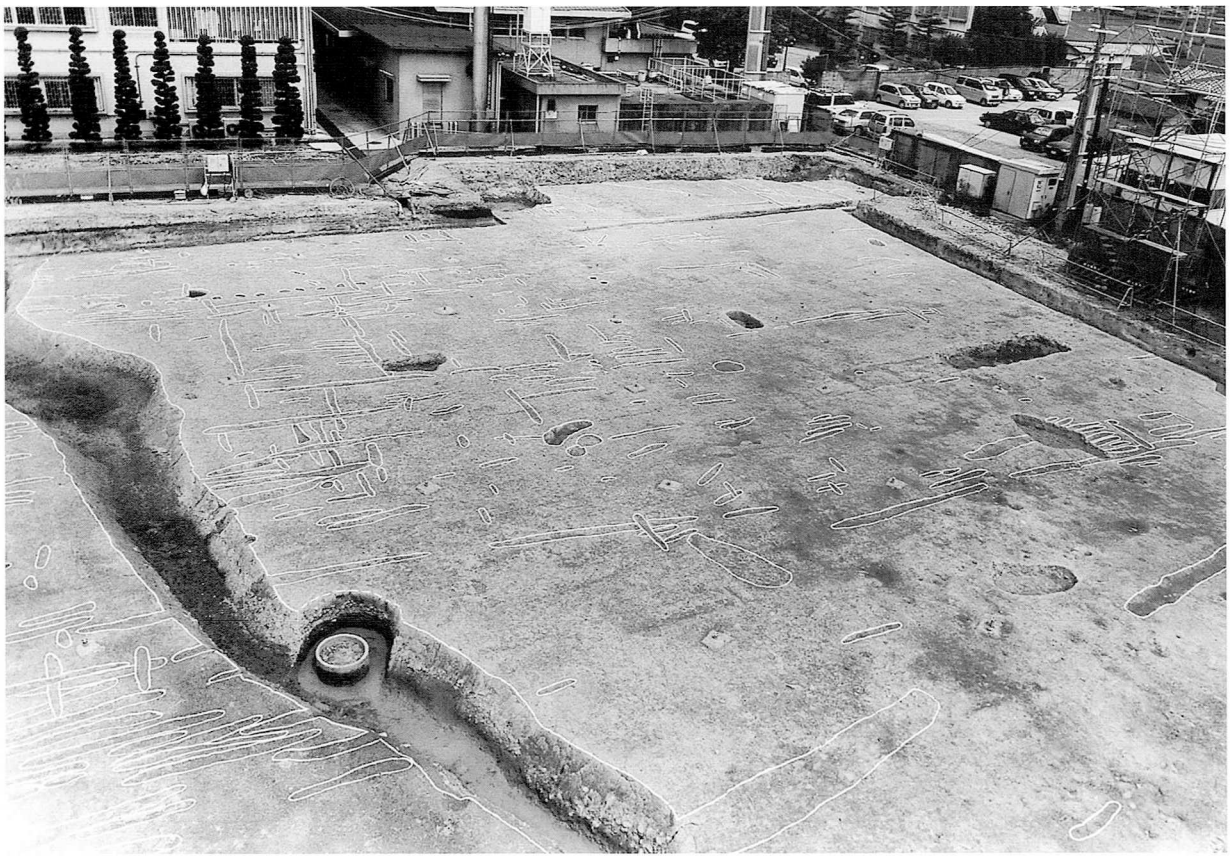


1．地山上面　検出遺構　中央部　　東北より

2．同　　上　　南より



1．地山上面　鋤溝群　西半部　　東北より

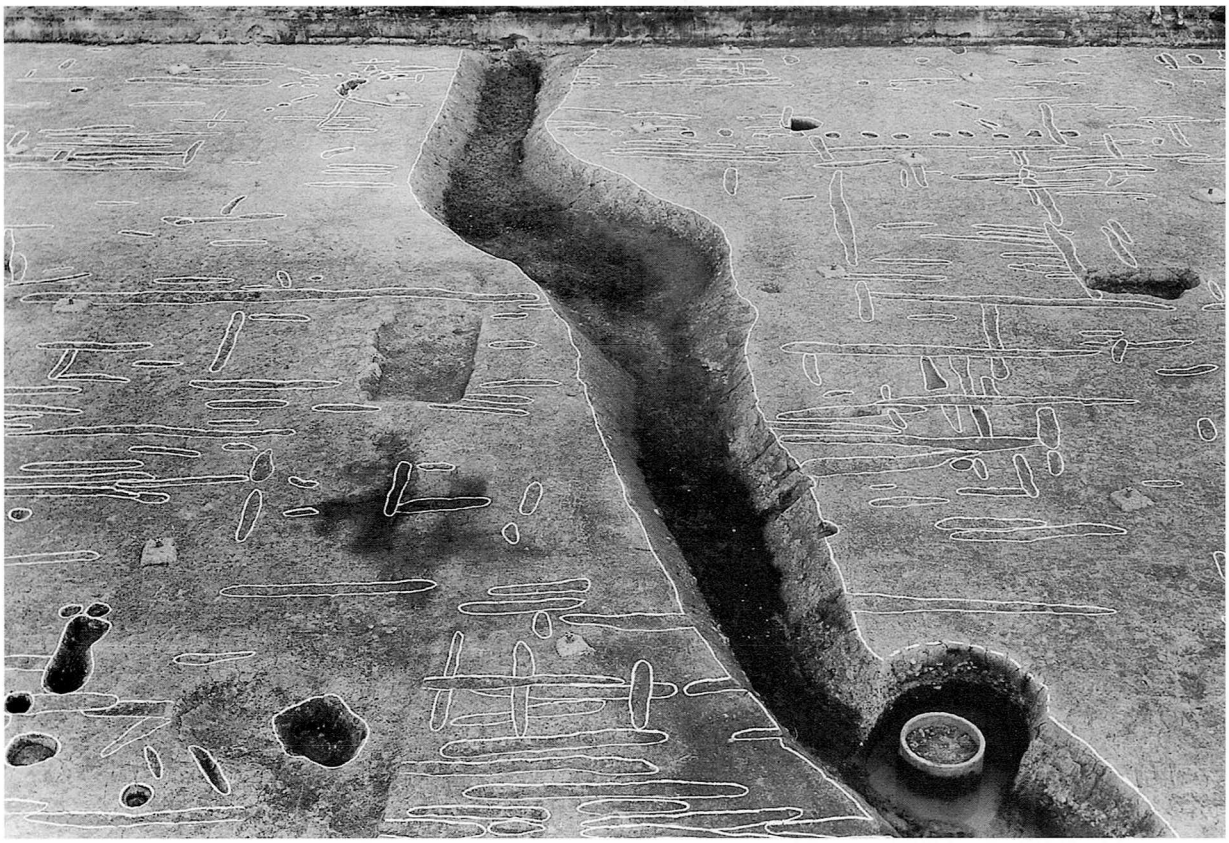


2．地山上面　鋤溝群　東半部　　南より

図版5　検出遺構

1．SD－2001　　東南より

2．同　　上　　東南より



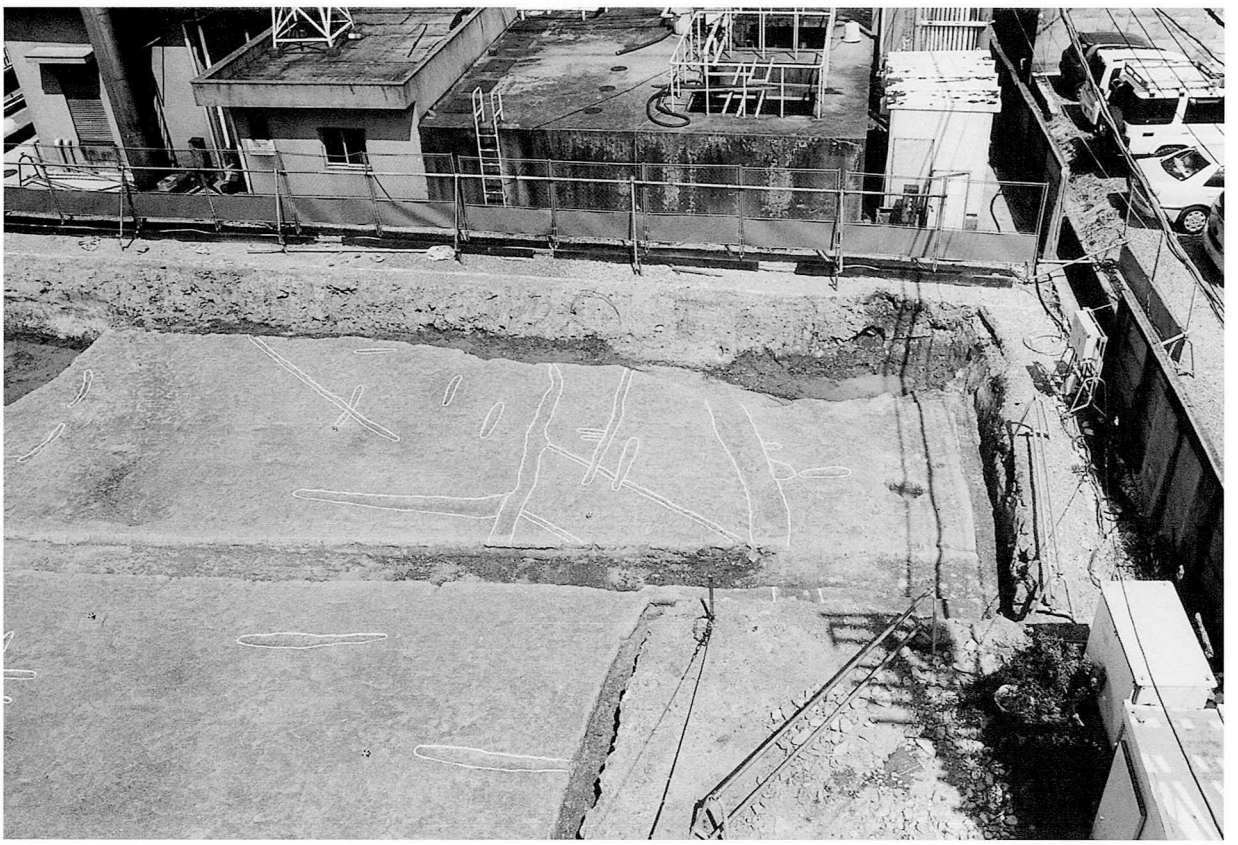
1．SD－2001　北半　　東南より

2．SD－2001　南半　　南より

1．SD－2001、SD－1019　　南より

2．SD－2001断面　　東南より

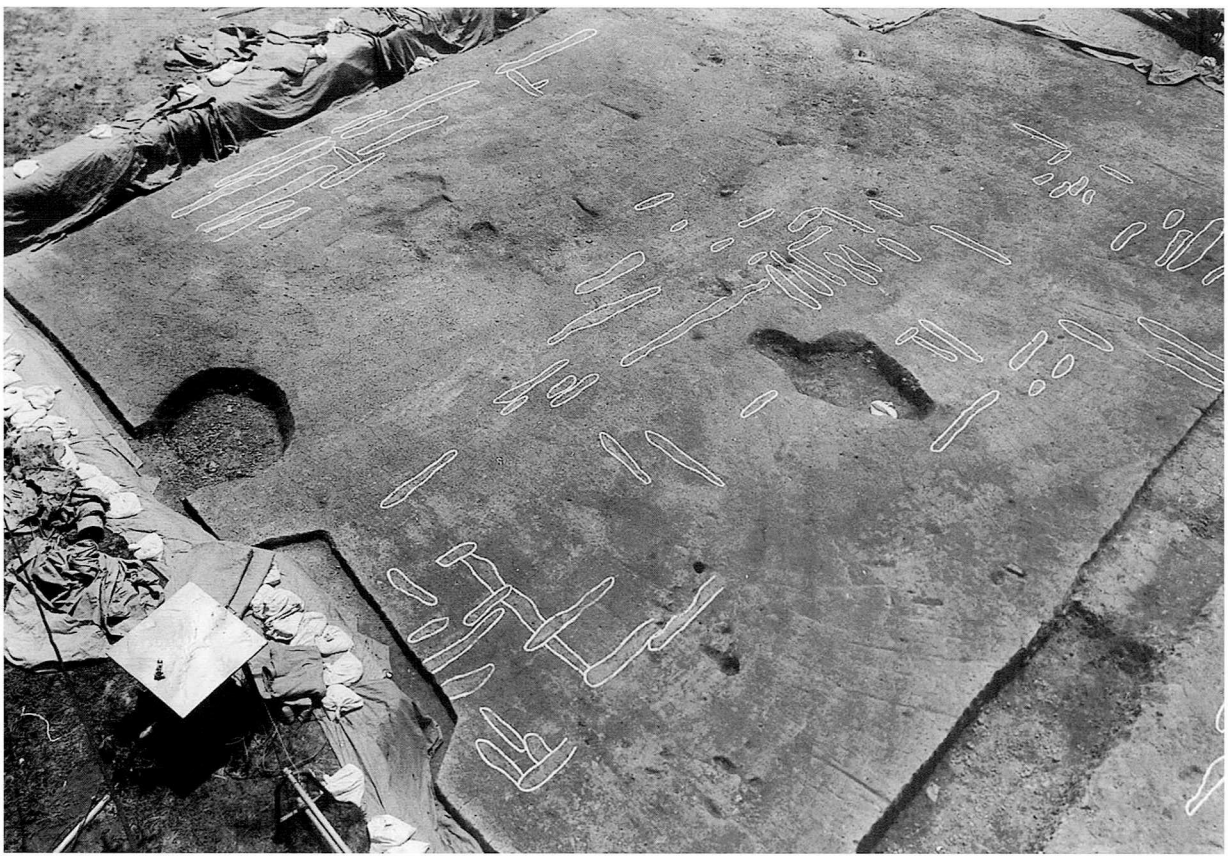
図版8　検出遺構



1．SD－1028　　東南より

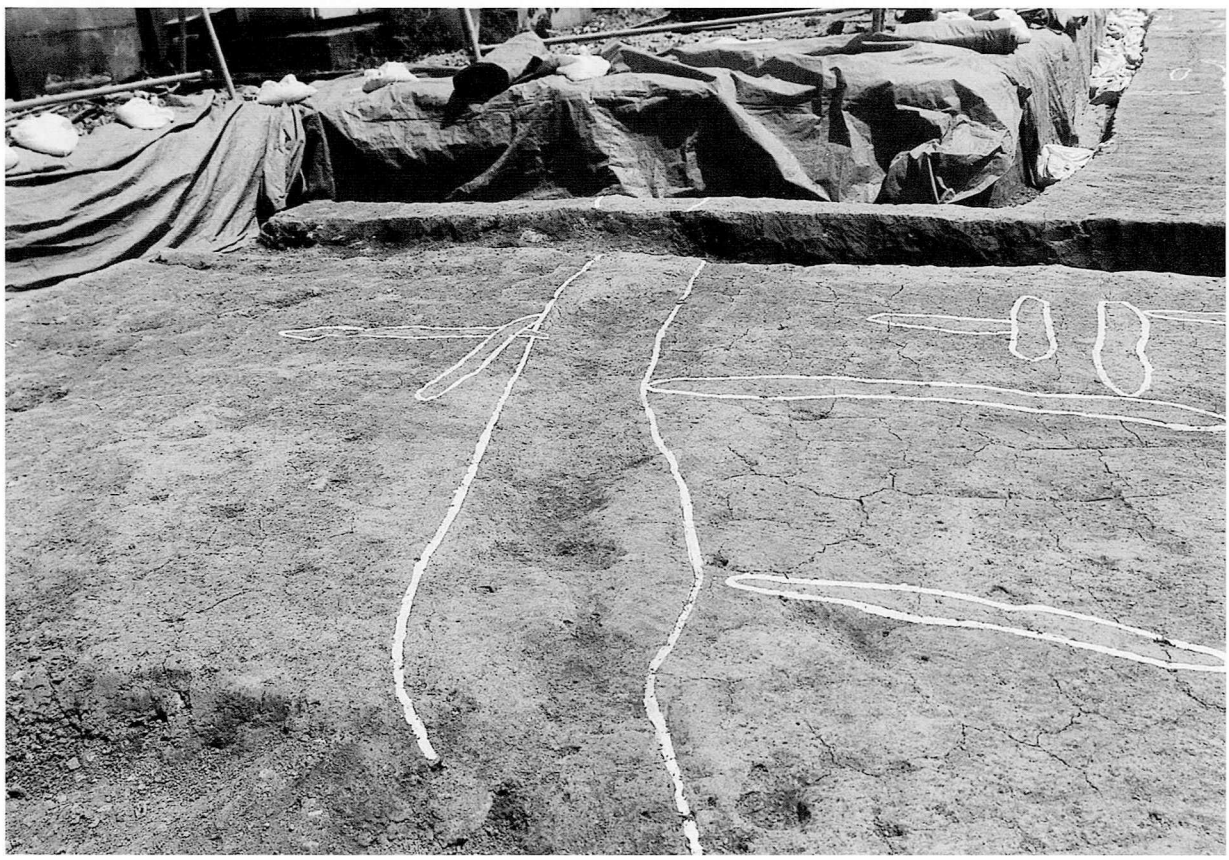
2．SD－1019　　東より

1．第4層上面　鋤溝群　　東より

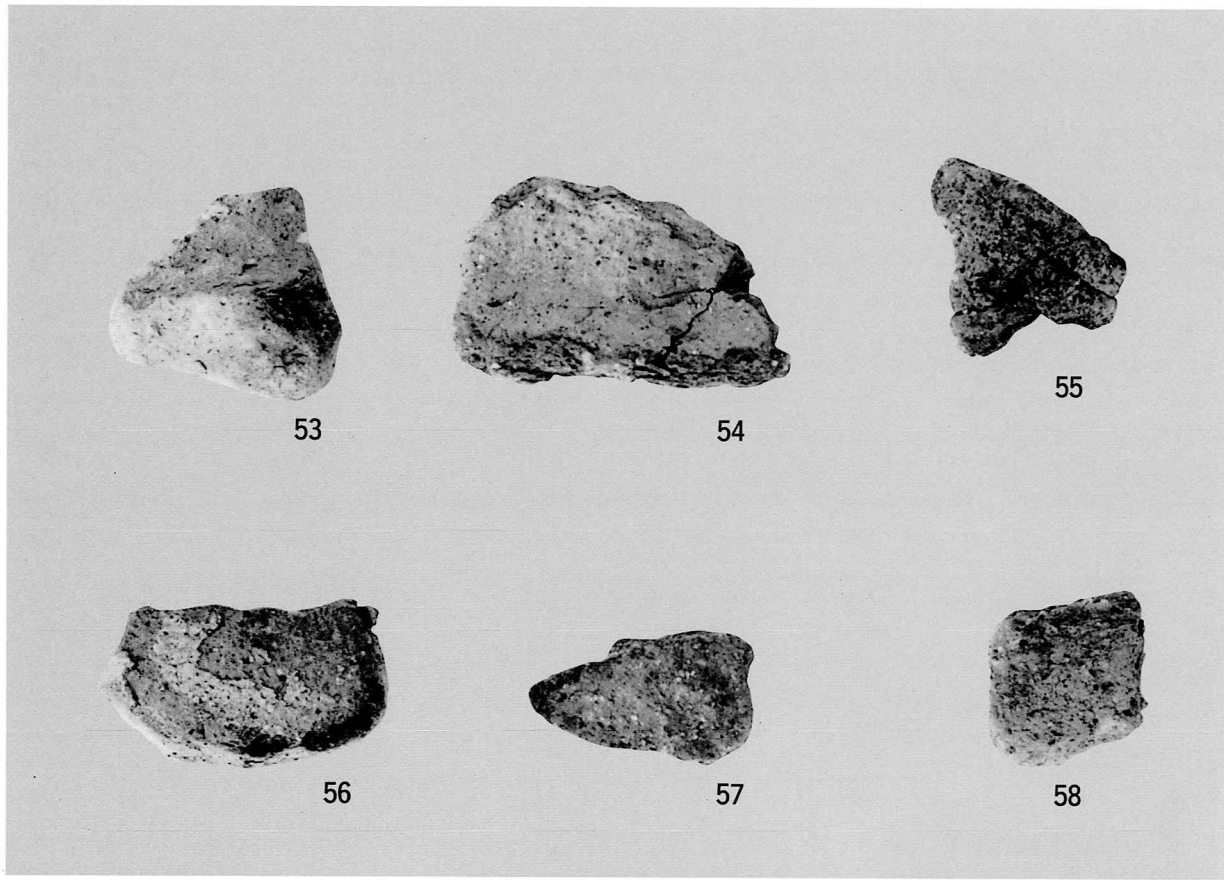


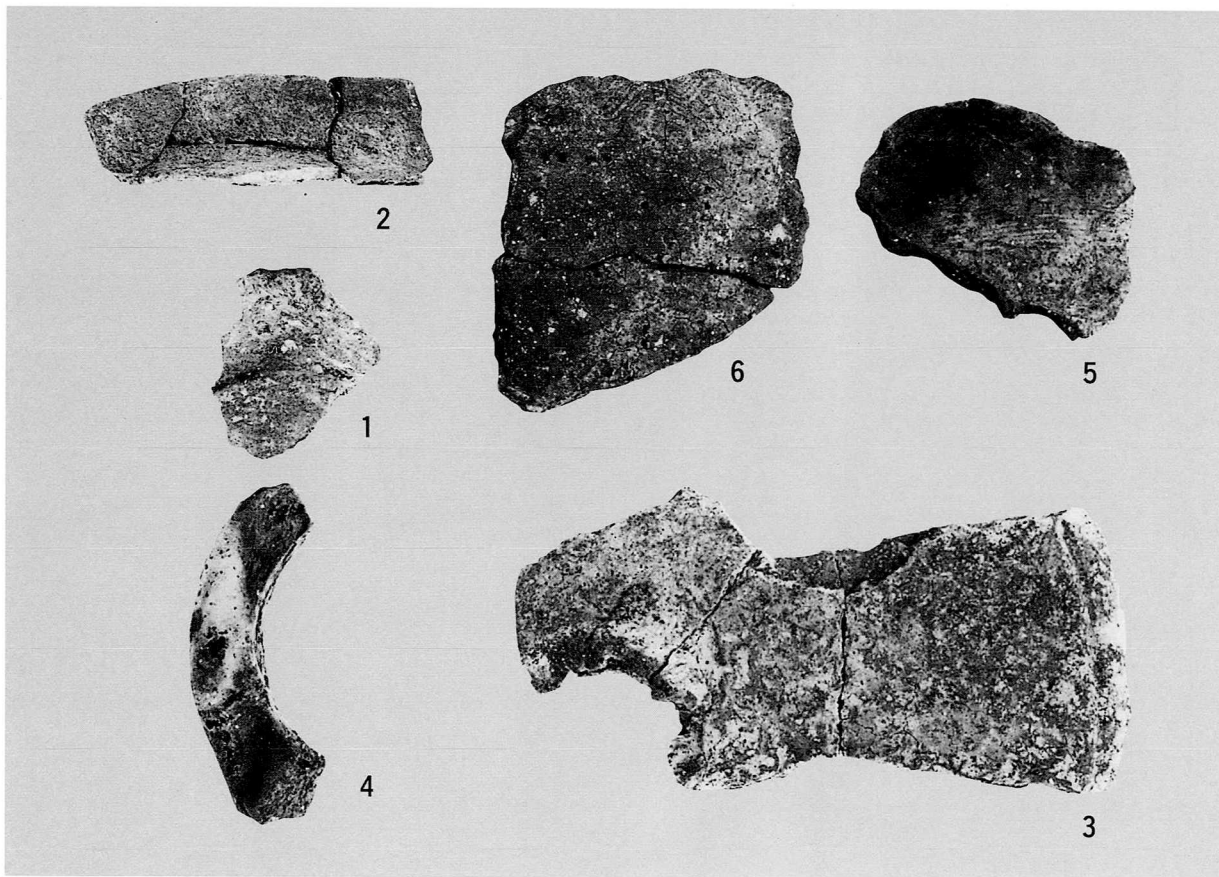
2．同　　上　　北より

1．第４層上面　鋤溝群、SD－1028　　東より

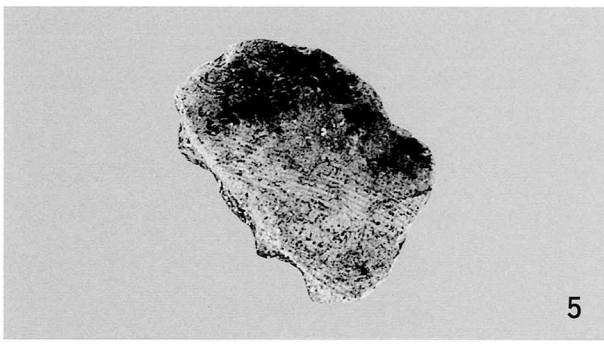


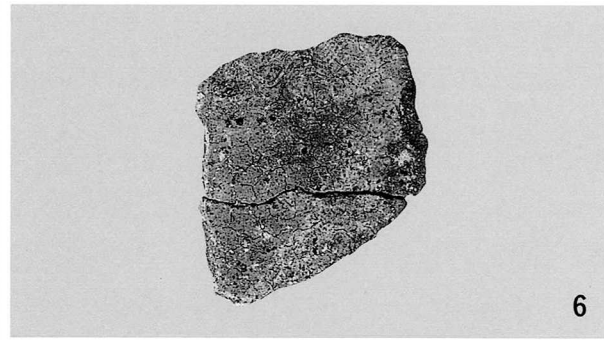
2．第４層上面　SD－1028　　西より

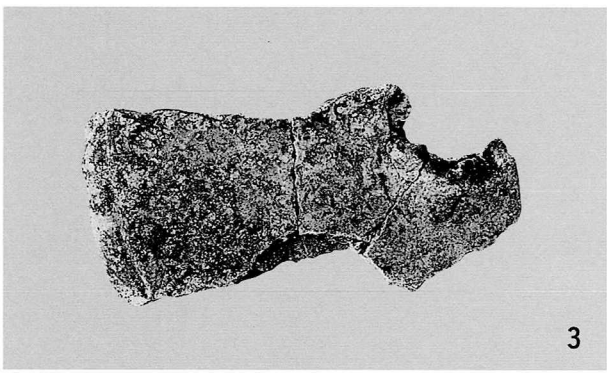


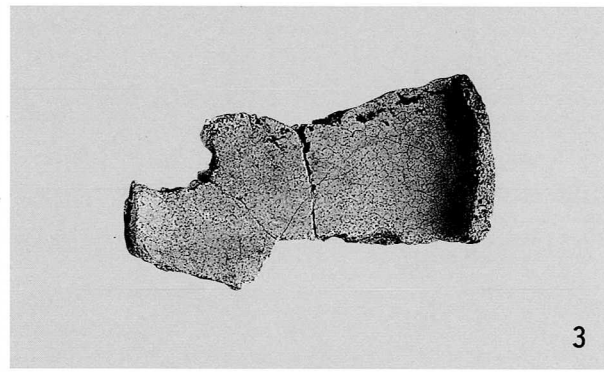


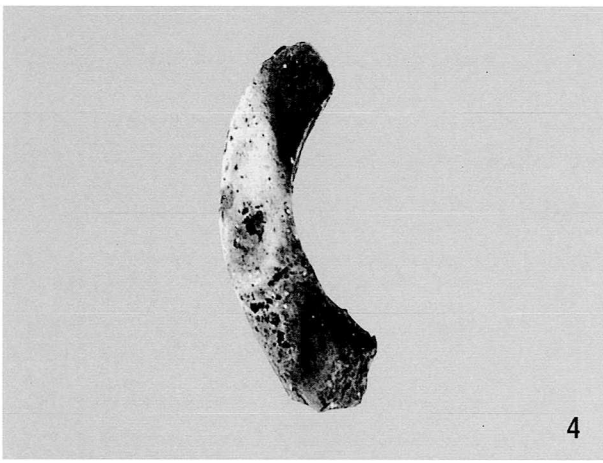
縄文土器：第４層（53、54、56～58）、第２～第３層（55）、
弥生土器：SD－2001（１～６）

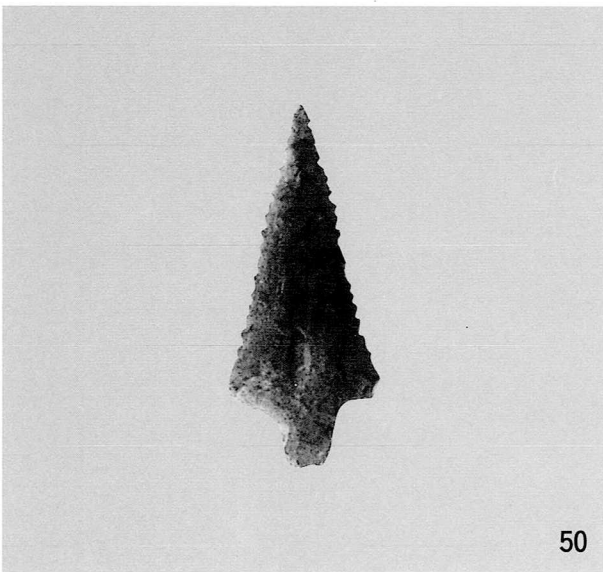


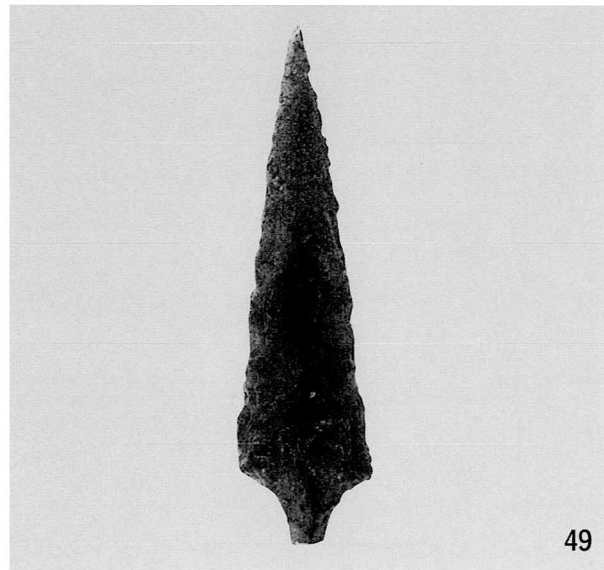




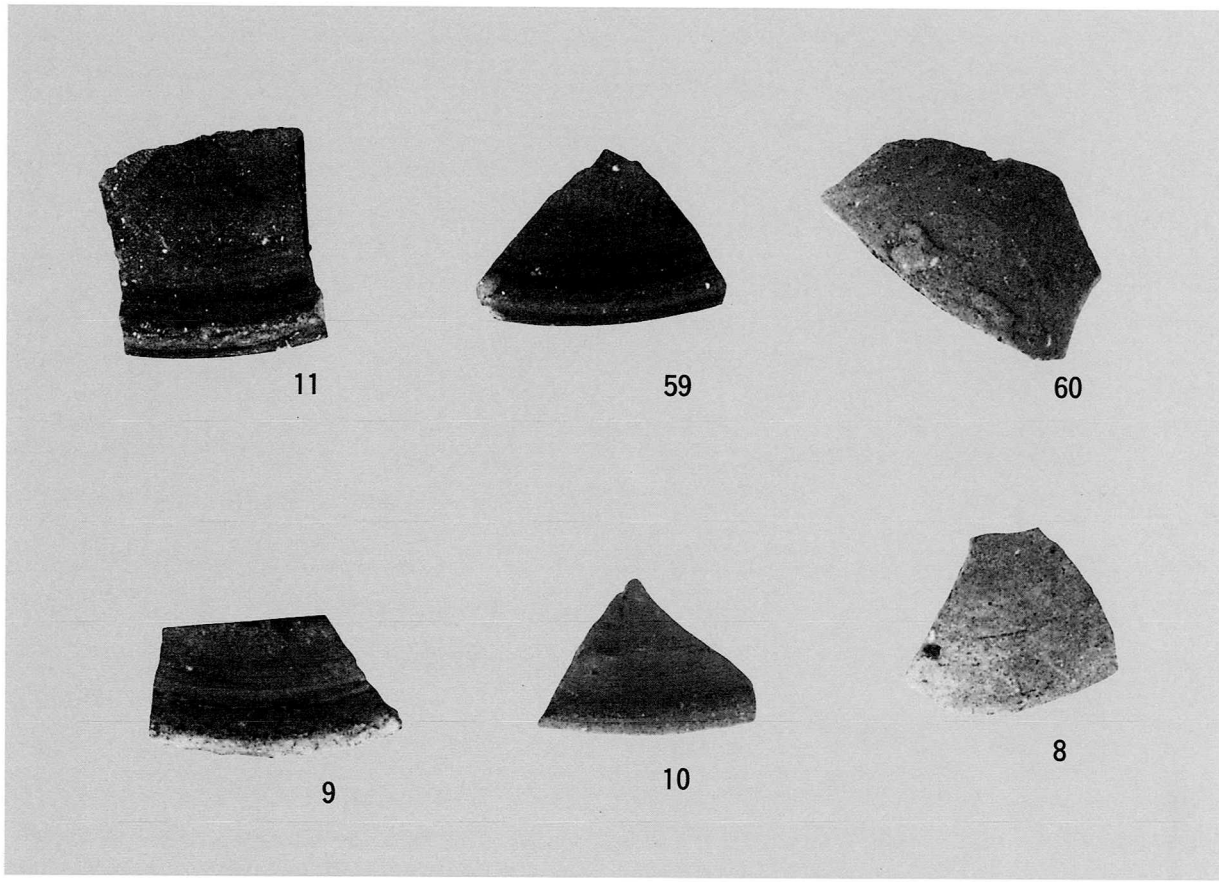


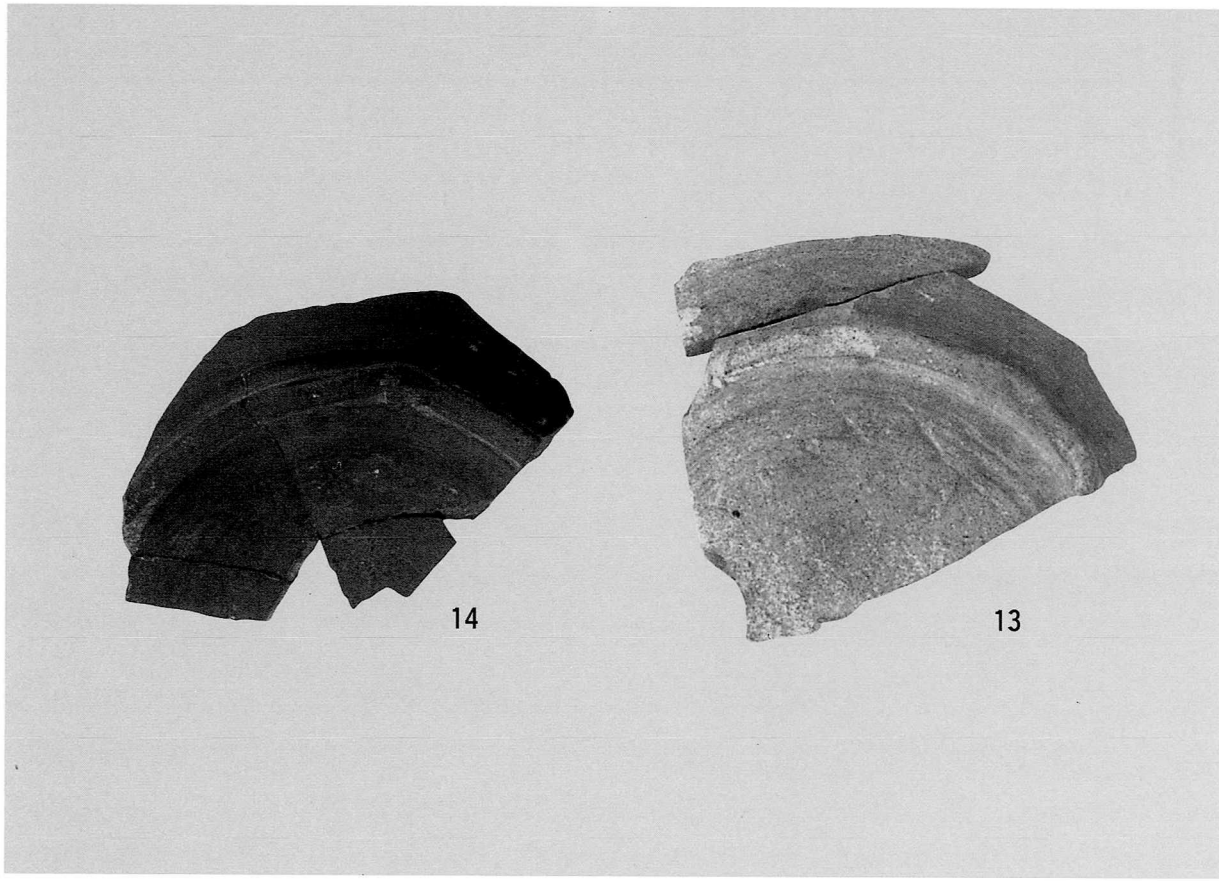




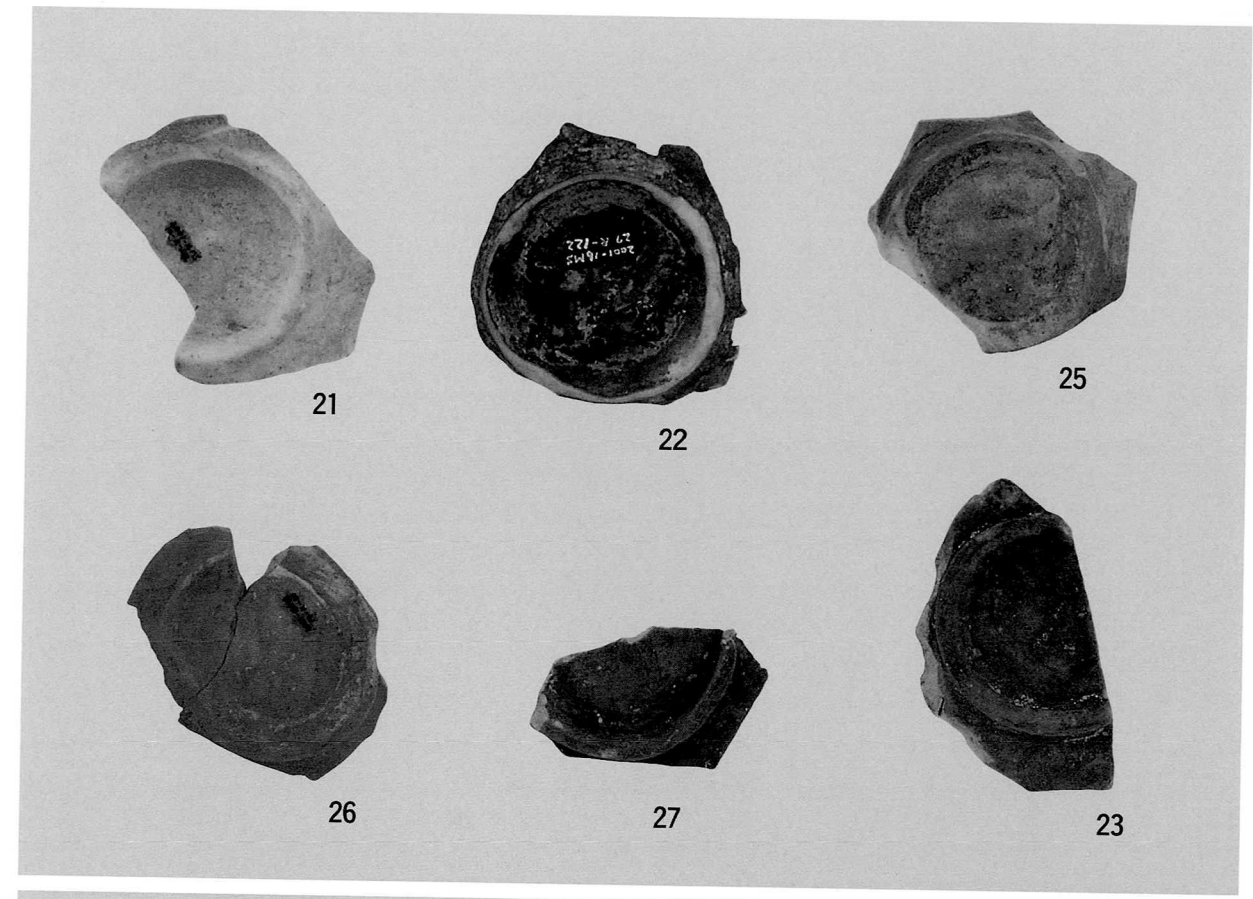


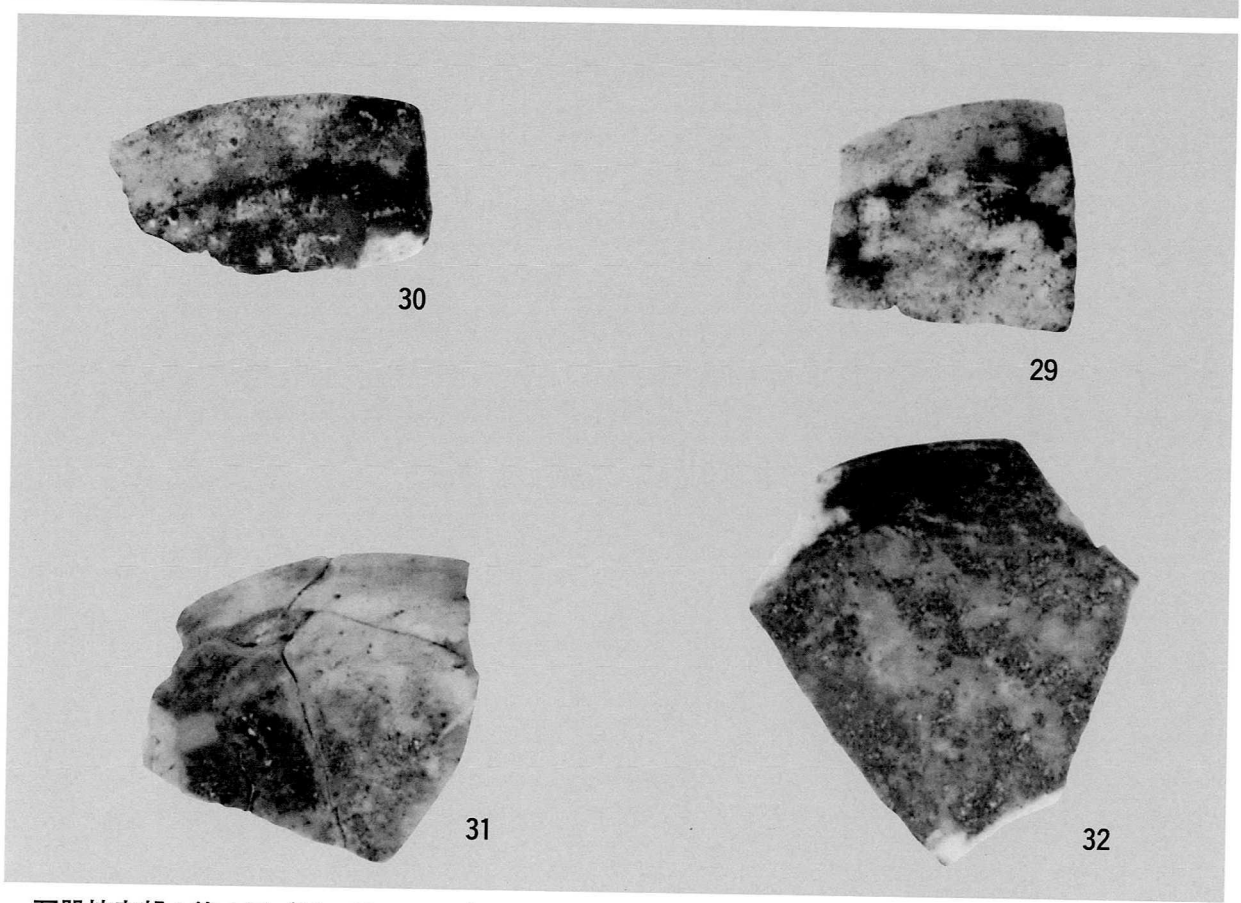
SD－2001出土遺物　弥生土器（３～６）、石鏃（49、50）



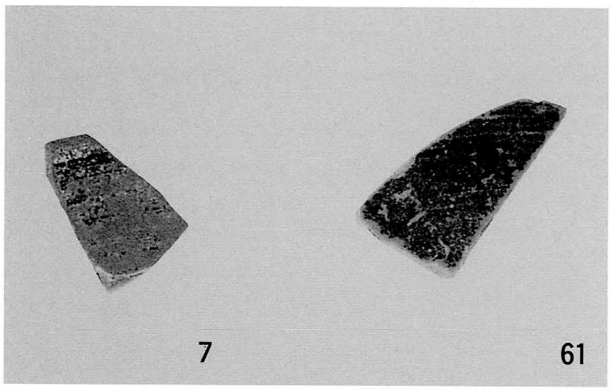


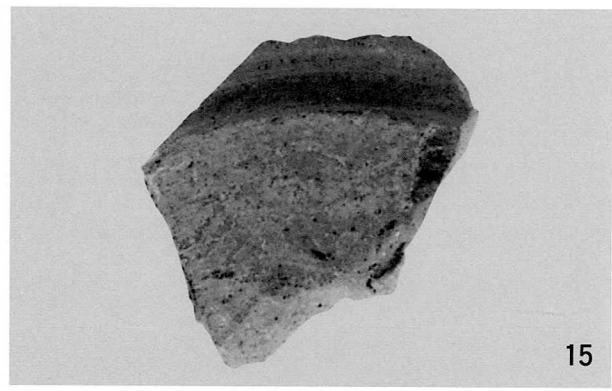
須恵器杯蓋：第４層（8～11、59）、第２～第３層（60）、
須恵器杯身：第４層（13、14）

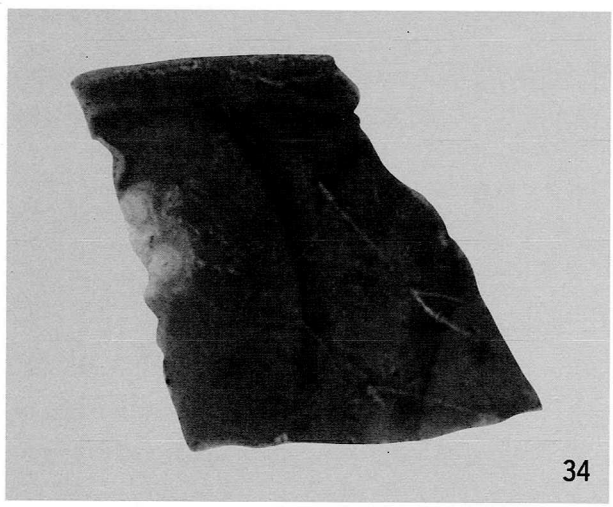


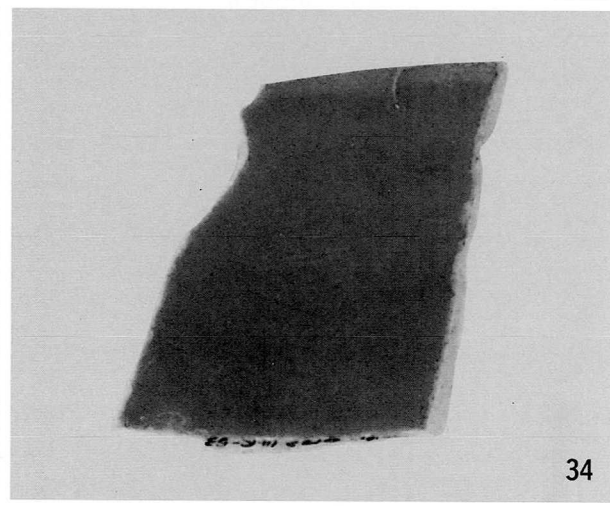


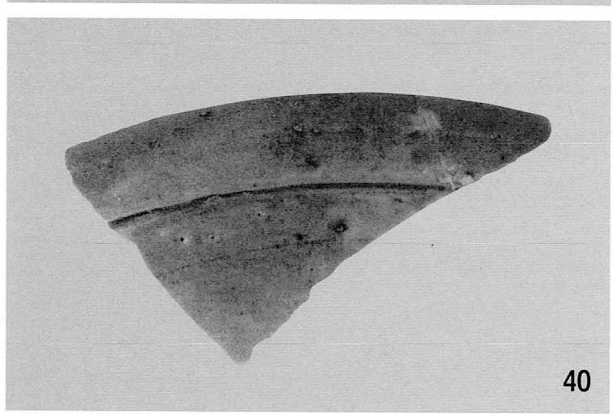
瓦器椀底部：第４層（21～23、25～27）、
瓦器小皿：第４層（29～32）

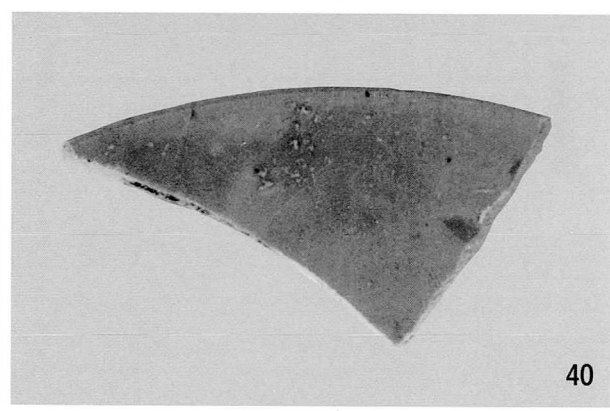


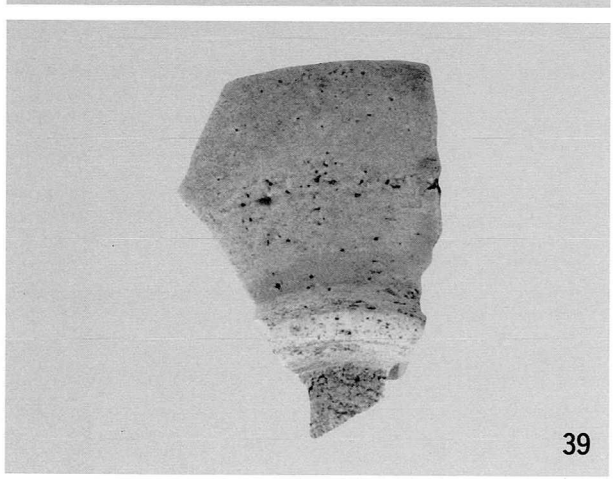


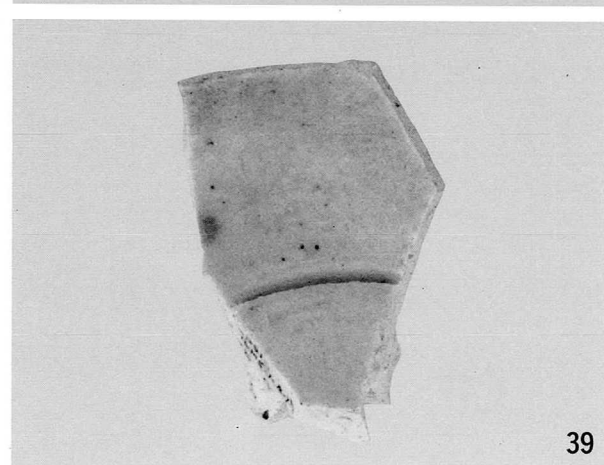




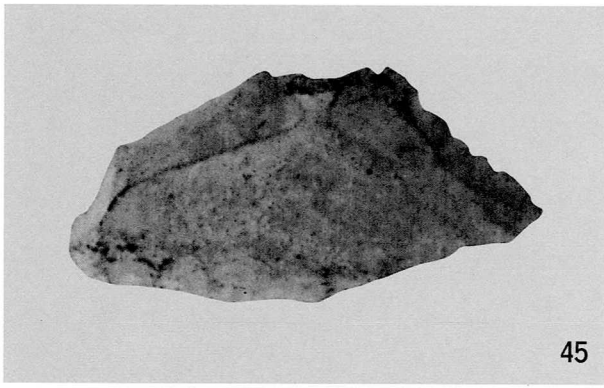


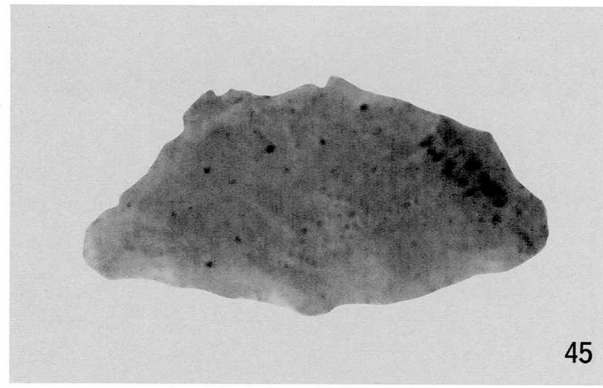


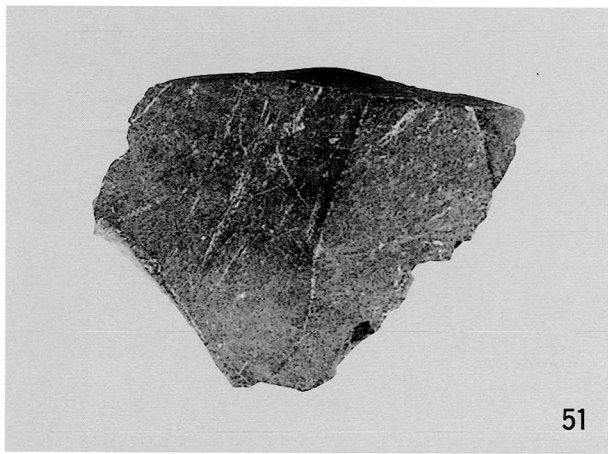


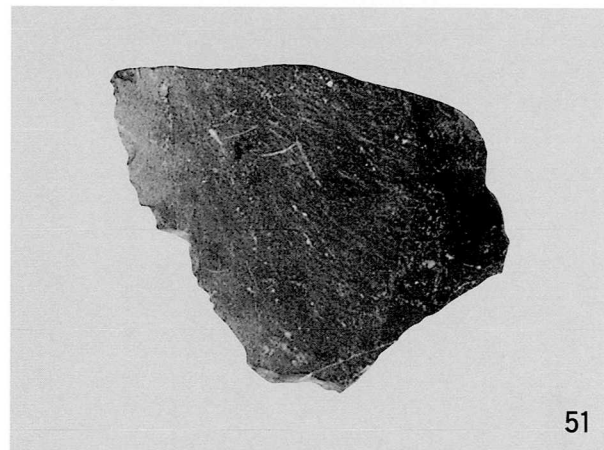


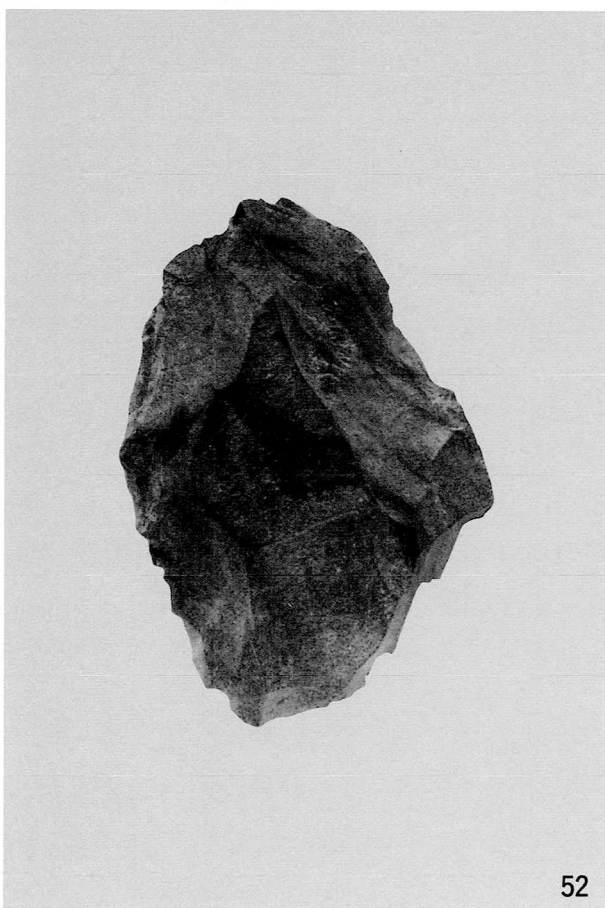
緑釉陶器：第４層（7、61）、須恵器：第４層（15）、青磁碗：第４層（34）、
白磁碗：第２～第３層（39、40）

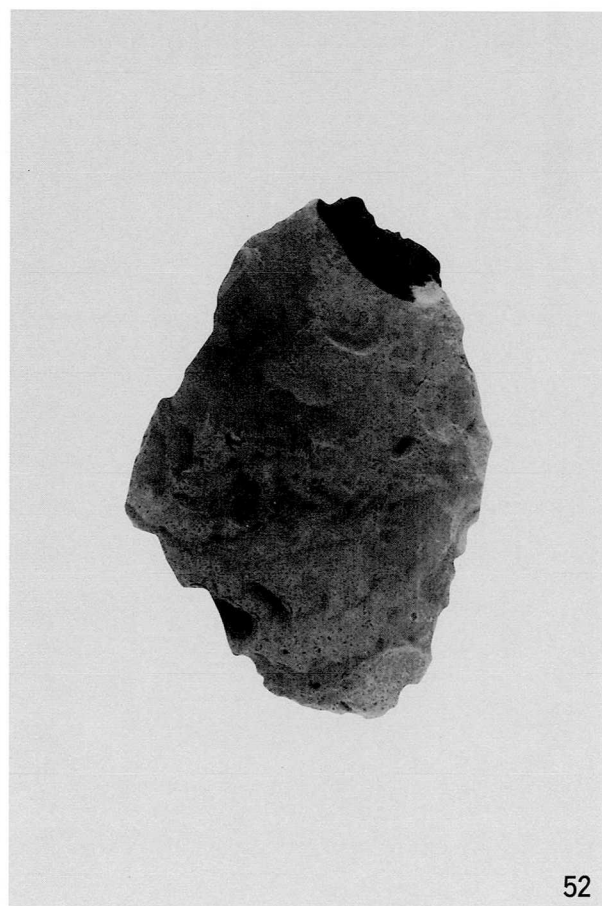






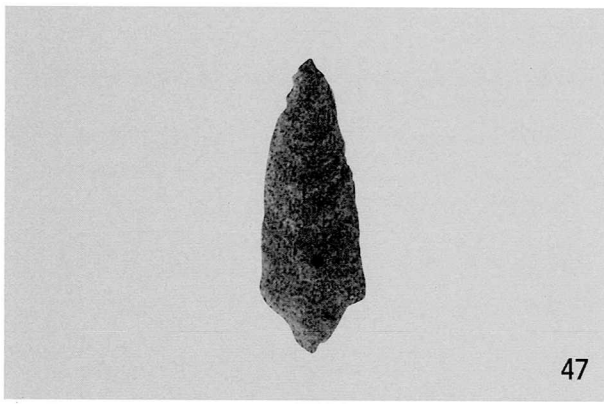


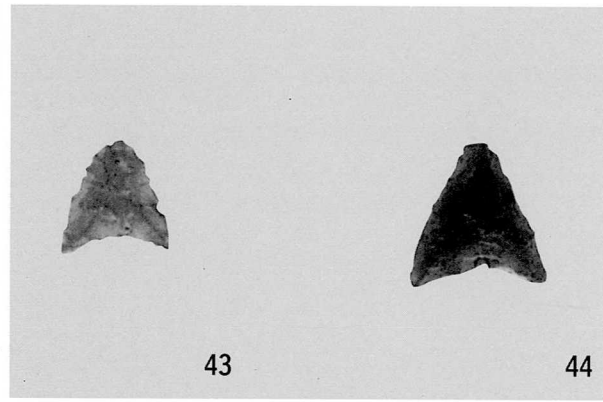


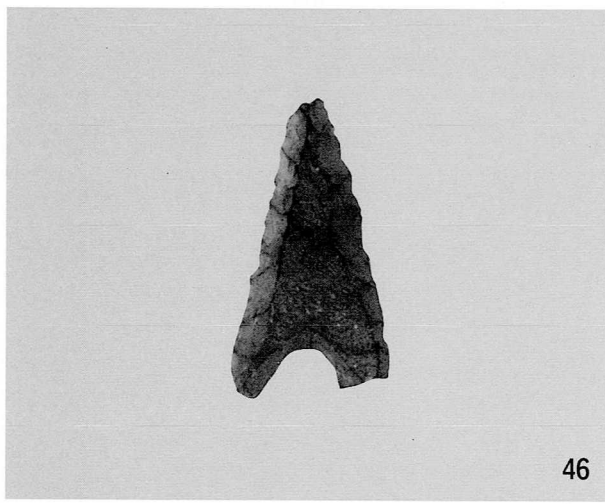


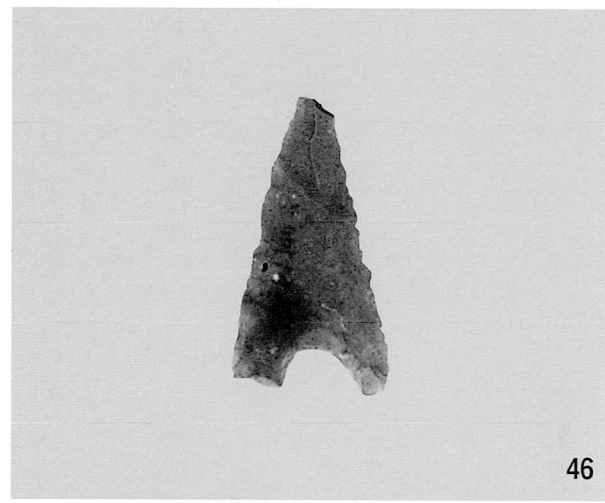
石器：第４層（45、51、52）

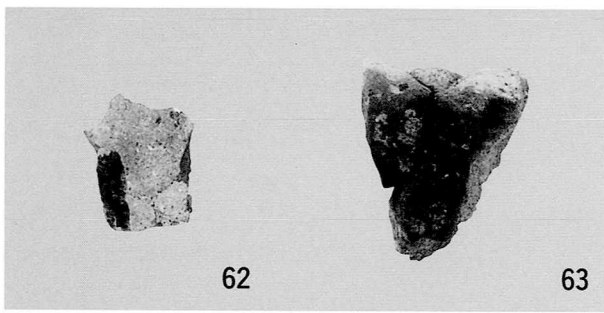
図版17　出土遺物

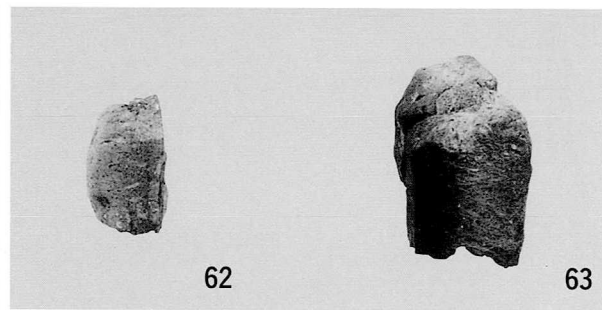


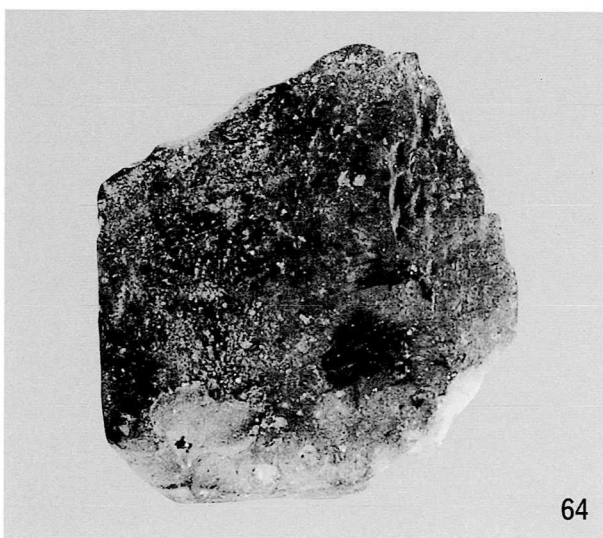


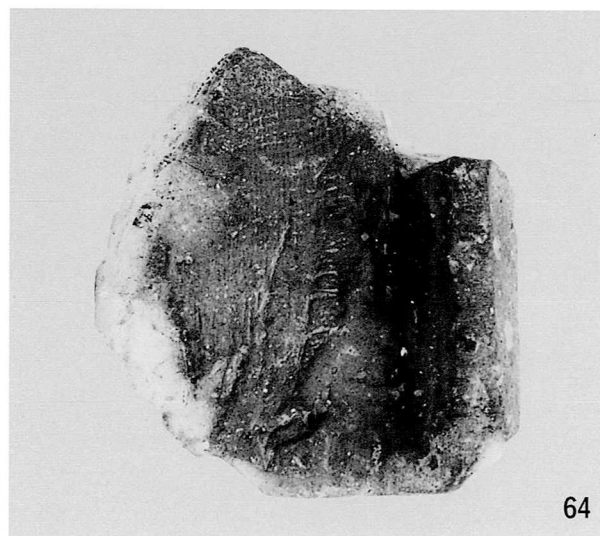












石器：第４層（43、44、46、47）、第２～第３層（47）、
フイゴ羽口：第２～第３層（62、63）、瓦：第２～第３層（64）

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第61集

森下代遺跡発掘調査概要

発行日　平成14年1月31日
編　集　貝塚市教育委員会
発　行　医療法人 永和会 貝塚サナトリウム
貝塚市森497
貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号
印　刷　摂河泉文庫（貝塚市北町20－18）